

CAMINOS-3 (*michi* : 道)  
(*Ensayos sobre la cultura de la peregrinación*)

Aiko Arai\*  
Bernardo Villasan\*<sup>\*\*</sup>

ÍNDICE GENERAL

1. 「アジアへの巡礼の道」

*Ajia e no junrei no michi*

(Camino de Peregrinación de Asia)

Por Aiko Arai : (新井 藍子).

2. EN EL CAMINO DE LA VERDADERA PAZ.

(Ensayo desde una hermenéutica cristiana)

Por Bernardo Villasan.

---

\* *Aiko Arai*. Ex profesora de la Universidad de Fukuoka (Japón).

\*\* *Bernardo Villasan*. Catedrático Emérito (名誉教授) de la Facultad de Humanidades. Universidad de Fukuoka (Japón).

## 1. 「アジアへの巡礼の道」

*Ajia e no junrei no michi*

(Camino de Peregrinación de Asia)

Por Aiko Arai : (新井 藍子).

### プロローグーピースボートでアジアを巡る

今までヨーロッパばかりに目を向けてアジアには興味がなかった。ヨーロッパは文化の香りが高い洗練された都市国家、アジアは貧しく、混沌とした猥雑な国という思いこみがあった。それは、大半の人が抱いている西洋文明に対峙した東方へのイメージであろう。

しかし、私にとって未知の国であるアジアを一度は訪れ、この目で実状を確かめたいという思いが強くなってきた。何よりも日本はアジアの一員ではないか、私たち日本人はアジア人ではないかと強く思うようになったのである。

今年（2018年）3月下旬、一か月以上かけてピースボートという船でアジア八か国、インドネシア、マレーシア、ミャンマー、シンガポール、カンボジア、タイ、ベトナム、中国を巡ってきた。

ピースボートは、「過去を知り、未来の平和をつくる」という趣意で1983年に初出港した。今回が35周年記念のクルーズである。その長期間にわたり、世界の一つひとつの寄港地へ平和のメッセージを伝えてきた。特に、ピースボートならではの冒険心、遊び心と学ぶ意欲という精神が、私が生涯抱き続けてきたものと同じであるというのもピースボートに乗船した理由となった。

また、ピースボートは、2017年のノーベル平和賞を受賞したICAN（核廃絶国際キャンペーン）の国際運営グループの一員として活動を牽引してきた。具体的には、核なき世界の実現に向け2008年から170名以上の被爆者の方々

がピースボートに招かれて世界各地で被爆証言を行ってきた。

その一人である三宅信雄氏が今回のクルーズにおられ、船内講演で当時の生々しい被爆体験を語られた。あの8月6日、16歳であった三宅少年は、広島の爆心地に近い市内の電車の中にいた。電車の屋根と窓が吹き飛ばされて頭上には空が展がっていた。一体、何が起こったのだろうと訝しく思った。電車の下から這い出た三宅少年は幸いにやけどをしなかったが、大やけどをして皮膚がべろんべろんに垂れ下がっている大勢の人々が川に向かって歩いている異様な姿を目撃した。大きな衝撃に襲われた。その後の数時間の記憶がすっかり失われてしまった。今も思い出せないでいる。

巨きなショックに見舞われた時に起こるといふ一時的記憶喪失であろうか。覚えているのは、自宅から母親をおぶって遠方にいる祖母の家に連れていったのがすでに深夜であったことである。その後、東京で学び、就職した三宅氏が東京被爆者団体に加わって、被爆者救援活動を行うのは50代になってからである。広島から逃げたのを後悔して救援に励んだ。

被爆して働けないという生活に苦しみ、差別をされて心に痛みを受けている大勢の被爆者がいた。

1980年代後半からは、アメリカ、ヨーロッパ、国連等で被爆証言を行い、核兵器の禁止と廃絶を訴えてきた。そして、ピースボートでも何度も語ってきた。

私は今まで人と人との出会いを大切にしたいと思ってきた。そのせいか、それらの人びとが発する魂の言葉に度々感銘を受けてきた。

今回の三宅氏の証言には、かつて感じたことのない痛みが胸の奥の底にずしんと響いた。

(一) スマラン国立大学（インドネシア）の日本語を学ぶ学生たち

天に向かって何本ものココヤシの樹木が長く長く直立している。一本の木のてっぺん近くに上半身裸の男がいる。次の瞬間、ナタをふるってココヤシの実を落とした。そして、するすると下に降りてきた。ココヤシの木にはどこにもコブがなくてつるつとしてるので、男の動作はごく自然でいかにも簡単そうであるが、私には神業のように見えた。昨日、屋台でてっぺんに穴があけられ、ストローがさされていた大きなココヤシの実を平気で値切って購入したのを恥じた。こんなに危険な作業をして並べられたココヤシの実なのに・・・ココヤシの液体はさらさらとしていてそんなに甘くない。啜っても啜っても飲みきれないほどたっぷり入っていた。

目の前に広がるココヤシの林を眺めながらその男に畏敬の念を覚えていた。

群青の空に光が強く降りそそいでいるバリ島を後にして船は、二日後、スマランの港に入っていた。

スマランは、インドネシア中部ジャワ州の州都で人口 164 万の大都市である。

港から約一時間、舗装されていない山道をがたがたとバスに揺られてスマラン国立大学（Universitas Negeri Semarang）を訪れた。

3万5千人の学生が学んでいる大学のキャンパスは広々としている。この大学を卒業して近いうちにピースボートで働くことになっているセプティアンという若者が車に同乗して、車窓から見える学部を指して、これが経済学部、これが教育学部、あちらに見えるのが法学部、言語、芸術学部などと教えてくれる。「全部で8学部あるんだ、インドネシアには、国立、私立併せてたくさん大学があるけれど、この大学は入学試験がとても難しい」と少し誇らしげな様子である。各学部の建物は古いが大きく、がっしりしている。キャンパスに

は、バトミントンやテニスコートがあり、学生たちが歓声をあげ走り回っている。どこの国でも見られる青春真ただ中の若者たちの姿である。

インドネシアはイスラム教徒がほとんどだが、そんな宗教は全然関係なく見える。また、頭と体を隠すイスラム社会の女性の服装をしている大勢の女子学生たちが、散歩したり、ベンチに座ってお喋りに興じたりしている。女子学生が多いのねーと声を上げると、「そうなんだ、学生の半数以上は女の子なんだ」と、セプティアンがこちらに顔をむける。

今、この車を運転してくれている女性は、2千人を抱えるこの大学の職員の一人である。若く、瞳が大きな美人で、英語を流暢に話す。まだ幼い女の子の母親でもある。インドネシアの女性は子供ができてでも働き続けるよー、そんなの当たり前でしょ、と言われてしまった。なんか日本の女たちより進んでいるみたい。後で、構内に入ってから日本語、ジャワ語を学んでいる学生たちに会ったが、みんな聡明で自信ありげで未来の希望にあふれていた。少し浅黒い顔にまっすぐこちらを見つめる伶俐そうな眼が今、目の前にちらつく。記憶をたぐり寄せてそのうちの何人かを綴ってみたい。

言語、芸術学部の言語学科には、ジャワ語学科と外国語学科の二つがある。日本語はフランス語、中国語、アラビア語と共に外国語学科に属している。

大小さまざまな銅鑼や鍵盤打楽器によるインドネシアの民族音楽を伴奏にしてジャワの伝統的な舞踊を披露してくれたのは、ジャワ語学科の男女の学生たちである。どらやたいこがどんどんどーんと室内に勇壮に響きわたる。それに合わせて輪になってくるくるスカートを翻して女の子たちが軽やかに踊る容は華麗であった。

観賞後には、ていねいに何回も楽器の叩き方、ジャワ踊りの一つひとつの所作をおざなりではない熱意で教えてくれたのには感銘した。大学内外で開催される特別なお祭りとイベントに、度々かりだされて大勢の観衆の前で披露し

ているうちに技に磨きがかかったようである。

優雅に指先を動かして踊ってくれた21歳の女の子ヴィアは、大学のインターンシップ制度に参加して今年（2018年）9月に沖縄に行く。6か月間沖縄のホテルで働きながら沖縄の民族舞踊を習ってくる、と語るヴィアは生き生きしていた。ジャワ舞踊と融合させたいのであろう。そういえば、ふたつの民族舞踊にはどこか共通点がある。

ヴィアはこの大学が掲げる創造、情熱、インスピレーションなどのモットーを体現させようとしている未来のアーティストである。

ジャワ出身の21歳のジュンディは、日本語を学んでいる。驚くほど正しい日本語を上手に話す。将来は日本語の先生になりたいと黒い瞳を輝かす。現在、「日本人のことわりの表現」という論文を書いている。最後の100ページの結論は日本語で書くという極めて優秀な女の子である。前述のインターン制度に参加して、関西で2か月間働きながら日本語に磨きをかけるつもりであると、あくまで意欲的であった。

同様に、アリナと6人の仲間たちも同制度に参加して今年、関西の橋本の観光地のホテルで接客業の体験をしながら日本語をマスターするつもりである。そのプランに私は少し心配になってきた。

このインターンシップ制度は日本を含めてどこの国の大学でも導入しているが、大学生が仕事を体験するという趣旨で、或いは、名目で企業は従業員と同じ仕事を学生にさせて賃金を払わないところが多い。無報酬で残業までさせているところもある。

ジュンディ、アリナと彼女らの仲間たちは大丈夫だろうか。将来、日本語の先生になるのが目的の彼女たちは、ホテルの接客業を通して日本語をスキルアップしたいのである。ホテルのような体験場所では、希望どおりの接客業はやらせてもらえなく、清掃係に回されることが多いらしい。

目の前で活発にしゃべっているイノセントな女の子たちが、傷ついて日本に

悪い印象を抱いて帰ってこなければよいと願うばかりである。

アリナは、あ、お祈りの時間だと言って同じ階にある祈祷室に去っていった。世界に17億人はいるとされるイスラム教徒は、一日5回メッカに向かってお祈りをするきまりがある。

直ぐに戻ってきたアリナとイスラム教について話をする。忙しいのに、毎日5回もお祈りするのは大変ね、と言う私に、そんなことない、一回のお祈りは5分くらいでいいよ、と屈託がない。恋愛も結婚を決めるのも全く自由で両親の許可は必要ない、将来、先生になったら結婚したい、子供が欲しいと、アリナは特にきまった宗教を持たない普通の女の子たちと同じであった。

## (二) マレーシアのブルーモスク

マラッカ海峡に面しているマレーシアのポートクラン港からバスでブルーモスクと呼ばれているイスラム教寺院に向かった。車窓からは雨の中に霞んではいるが、目をこらすと色鮮やかな青々とした樹木が見える。それらの木々の間からは、時々モスクの小さい丸屋根がのぞいて、ああ、ムスリムの世界にいるのだと実感できた。普通なら30分くらいで着くという距離を、雨による車の渋滞のせいで、一時間近くかかってしまった。よく晴れた日なら首都クアラルンプールからブルーモスクのドームとミナレット（モスクの高塔）が見える。それほどモスクのあるセランゴール州のシャー・アラムという街は首都に近い。

雨は止んでいた。雨で洗われた清浄なモスクは雲のかかった空を背景に優美な姿で立っていた。目の前の巨きなモスクをひと際美しく見せているのは、紺青色と銀色の菱形模様が覆われたドームである。その下部の石碑にはコーランの詩篇がアラビア語で彫られている。四隅には、世界で一番大きいドームに釣り合った140メートル以上ある細身の4つのミナレットが天をも突くばかりに

上へ上へと伸びている。

1980年代の後半に完成したマレーシアでは一番、東南アジアでは二番目に大きいこのモスクは、セランゴール州の7番目のスルタン（君主であるスルタンは各州にいる）、サラウディン・アブドゥル・アジズ・シャーの着想によるものである。マレー様式と近代建築デザインを併せ持ったモスクの正式名にはこのスルタンの名前がついている。東南アジアにおけるイスラム世界の至高のシンボルとなっている。

2万5千人の信徒を収容できる第一の礼拝堂は二階建てで、二階は女性信徒の祈りの場である。

透き通った青い色のステンドグラスが壁のかわりに上部にも下部にも隙間なく嵌めこまれた礼拝堂には、微かに光が射しこんでいる。床には、モダンな模様が織り込まれた濃紺いろの絨毯が敷かれている。天井にはピンボールライトが取り付けられていて、頭上に星がまたたいている碧い夜を仰ぎ見ているようである。その空間全体が地球からずっと離れた宇宙にいるような錯覚を起こさせた。礼拝堂は平安と静謐に満たされている。

そこでは、ひとりの男性がミフラーブに向かって跪き、上半身を前傾させて熱心に祈りを捧げている。ミフラーブはモスクで一番重要な聖なる場所である。メッカ（サウジアラビアの都市でイスラム教徒の聖地）の方角を示している礼拝堂正面のその壁は、シンプルな白い大理石とトルコのアンティークタイルで造られている。そこから、目には見えない清澄な神威が醸しだされていた。

イスラム教徒にとっての唯一神アッラーの像はそこには飾られてはいない。アッラーは人間の視覚では捉えられない創造主と考えられているからである。

アラビア文字、彫刻、絵画及び建築など様々な異なったジャンルの精緻を極めた見事なイスラム芸術が、この聖堂の扉、窓、廊下、柱、天井などあちこちに見られた。



庭園に出ると、雨あがりの透明な大気の中で光がまばゆいばかりであった。天の薄い青いろを背景に濃い青いろのモスクがくっきりと屹立している。四本のミナレットの先端が銀いろに尖って光っている。

コーランの詩篇の天国から着想をえてここに現れたイスラム芸術の粋を集めた庭園は、緑いろの樹木とそこに咲き乱れている濃い桃いろの熱帯特有の花の群落に囲まれている。楕円形の池の真ん中からは、一本の細い噴水が銀色のしぶきを飛ばしながら光線の中できらめいている。

ここから眺めるモスクの全体像は、巨大さが持つ醜悪さからはほど遠くすっきりと洗練された姿をイスラム教徒でない私たちにも惜しみなくさらしていた。

### (三) ミャンマーの日本語を学ぶ若者たち

こんなにも美しいマレーシアのブルーモスクを後にして数日後には、船はミャンマーのヤンゴン港に入っていった。

港から2時間近く、バスは舗装されていない道をがたがた走っている。目の前のヤンゴンリバーを渡ればミャンマーの最大都市、ヤンゴンの街に入る。港から何だか以前見たような風景がずっと続いている。そうだ、これは、もう数年も前に訪れたインドの郊外を車で走った時に車窓の両側に広がった風景なのである。ちっぽけな、貧しい屋台がずっと並んでいる。その後ろには、住まいなのであろうか、茅葺き屋根の掘っ建て小屋がある。裸足で子供たちが犬と一緒に走り回っている。何をするでもなく、たむろしている男たちがいる。赤ん坊に乳を飲ませている若い女や、たべものを口に運んでいる年寄りもいる。たくさん車が行き交ってあげる土ほこりを全然気にしていないたくましさを見せつけているのは、インドもここも同じである。屋台がなくなると田園風景がしばらく続く。耕されていない荒れた土地も所々に見える。

長い間続いた軍事政権が2011年、民政に移管され、それ以降、ミャンマーでは、経済開放路線が敷かれるようになった。国際社会に対して門戸を開き経済が急速に発展を遂げていると聞いていたが、今、目の前の人々の貧し気な生活を見て、その恩恵が地方には及んでいないと分かる。日々の糧を得るため学校に行けずに読み書きの出来ない子供たちも多いらしい。後で何人かのヤンゴンの大学生たちと出会い、交流することになるが、都市と地方の教育の格差が大きいことが分かった。

ヤンゴンリバーを渡ると市内に入った。古く低い建物が多い。清潔にはこだわりのない人々が、勝手に生活しているような雑然とした空気が醸し出す街並みが、インドのそれと類似している。所々に近代的な高いビル、マンションもあれば、仏教国を思いださせる金いろの巨きなパゴダもある。

街中から少し外れたところにある仏教の僧院に着いた。ミャンマー国のあちこちにある僧院のひとつである。この国の8割以上が仏教徒である。僧院は折りや修行、仏教の普及に務める場だけではなく、子供たちを集めボランティアの先生を呼んで無料で学習の場を提供して教育の普及にも努めている。このように、仏教は一般の市民の生活にしっかり繋がっている。

日本語を学んでいる十代の子供たちや、ECSC (Educations & Career Supporting Center) の日本語学校の学生たち、マンダレー外国語大学及び国立ヤンゴン外国語大学の日本語学科の大学生たち、僧侶、その他の諸々な人たちを含めて総勢数十名が集まっている広間は熱気でむんむんしている。特に、女の子たちの鮮やかなピンク、白、赤、青、水色、黄色など色とりどりのロンジー (ミャンマー特有の裾の長い巻きスカート) をまとった姿が、華やかな花の群落を眺めているような楽しさだった。

ヤンゴンでは、現在、日本語学習熱が盛んである。英語に次いで学びたい外国語なのである。

ミャンマーが経済開放路線に転じるようになり、この国に進出してくる日系企業が 350 社以上に増えた。日本語の話せる優秀な人材が必要になってきたのである。国内に二校しかない外国語教育の中核機関は、国立ヤンゴン外国語大学と姉妹校のマンダレー外国語大学である。大学生たちは、ビジネス会話レベルの日本語能力を身につけようと必死に日本語を学んでいる。

清楚で聡明な感じの 24 歳のポーポーは、ヤンゴン外語大の日本語科を卒業した。現在は、旅行会社に勤めている。在学中にインターンシップに参加して東京の新宿の旅行会社で数週間仕事の体験をしたと、上手な日本語で話す。その大学について問うと、「ヤンゴンで日本語教育を受けられるのは、ここだけで、日本語学科はとても人気があるので、入学試験が難しいの。全部で 15 学部あり、生徒の数は 4000 人ぐらい。その中で日本語学部生は 1 学年 60 人程度よ」と、少し恥じらいを浮かべて答える。

隣りで肯きながらにこにこして聞いていたチャンシャウトウは、21 歳で同大学の日本語学科の 3 年生。日が沈む寸前の空の薔薇いろのロンジーとお揃いのぴったりした上着を上品に着こなしている。あどけなく可愛らしい彼女の夢は将来、大使として日本に来ることである。

「わたしは、ヤンゴンの近くにあるマンダレー外語大の日本語学科の 1 年生よ」とまだ、たどたどしい日本語を話すのは、初々しく爽やかなエーさん。「この大学には英語学科、フランス語学科、ミャンマー語学科など全部で 9 学科あるの。その中でも、日本語の人気は高く、約 800 名ぐらいの学生が日本語を専門に勉強している。みんな将来、日系企業に就職したいと思っているわ」一つの教室には、100 名を超える学生がいるらしい。まだまだ、視聴覚教材の種類や機械が少なく日本政府は、マンダレー外語大に無償資金協力を行ったこともある。

日本語を話せる IT エンジニアを求めている日系 IT 企業もある。

オレンジいろのブラウスに濃紺のロンジーをカッコよく装っている 23 歳

のザーチティは、物理学を専門に学んだ後、ヤンゴンの会社で働いている IT エンジニアである。日系 IT 企業で働きたいので ECSC で日本語を習い始めて一年になる。はっきりとよく分かる日本語を話す。「わたしも同じ目標があるの」と同僚のテッミャッノーライ、22 歳が夢を追い求めるように遠くを見つめながら言う。やはり物理学を専攻した IT エンジニアである。彼女らに、結婚はしたくないの、と問う私に、思ってもみなかったという表情で、まだまだ、わたしたちは若いよ、もっともっと仕事がしたいの、と屈託なく笑う。

三十代の既婚者のウィンも物理学を学んだ IT エンジニアである。日系企業で一年半働いた経験がある。流暢な日本語を話すチャーミングな女性である。現在、子供が小さいので休職中であるが、いずれは復職したいと意欲満々である。夫も IT エンジニアである。現在、社長が日本人の日系企業に勤めている。そこで彼らは知り合ったのである。夫を口にしたウインの眼はきらりと光った。

笑みをたたえて近づいてこられたのが、国立ヤンゴン外語大、日本語学科の元学部長のミャチェ先生である。今、ここに集まっている十代の子供たちにボランティアで日本語を教えている。

経済発展を遂げているミャンマーでは、親たちが教育熱心で学校、家、僧院などで子供たちを勉強させている。子供たちは遊ぶ暇もないらしい。休みの日は何をして遊んでいるの、と尋ねても誰も答えられない。大学生が代わりに「そんな時間がないのよ、大学の入学試験は難しいので、子供の頃から勉強する必要があるの。特に、国立ヤンゴン外語大はととても難関よ」

事実、ミャンマー社会では競争が激しくなっている。日系企業は日本社会と同じ求職システムをとり、少しでも優れた人材の早期採用を実施している。350 社以上の日系企業では、大卒ミャンマー人材登録者は 2 万 4 千人以上にもなる。その中の半数以上がビジネス日本語会話レベルに達している。それが、

若ものたちが日本語を学ぶ立派なモチベーションになっているのである。

#### (四) カンボジアの貧困の子供たちを守る NGO 訪問

カンボジアの海の玄関口、シアヌークビルの港近くにあるリゾートビーチは、ハワイのそれより美しいと言われている。熱帯の光の下に凜と構えて大きなピースボートが停泊しているのがビーチから眺められる。碧くさざ波が輝いている海を前にカンボジアの暗い時代に思いをはせる。1970年代のポル・ポト政権下の自国民大虐殺、1980年代の内紛は、いまだに地雷、貧困問題など大きな爪跡を残している。カンボジアが平和になったのは、やっと20年前に総選挙が行われて民主政権が樹立してからである。

ピースボートの活動の一つとして「地雷廃絶キャンペーン」がある。地雷除去に必要なコストは平方メートル100円ということから「カンボジアから地雷をなくそう100円キャンペーン」という募金活動を行っている。この20年で154万平方メートル以上の地雷原が安全な土地へと生まれ変わった。

1988年には、年間数千人が被害にあったが現在では100人以下となっている。

元来、カンボジアは国民の95%が仏教徒である敬虔な仏教国である。過去の暗い歴史に目をそむけることなく、失われた伝統文化をもう一度復活させること、様々な困難に苦しんでいる青少年を救援することに現在、国民は取り組んでいる。新しいカンボジアを目指して努力を重ねているのである。

首都プノンベンから290キロ離れているシアヌークビルの街及び、そこに近いリゾートビーチは、中国の進出により経済が発展しているが、物価が高騰している。港に待っていたトゥクトゥク（三輪バイクタクシー）の運転手に「この建物の看板は全部中国語で書かれているのね」と話しかけると、色黒で瘦

せた年齢不詳の運転手はすぐにうなずいて「そうなんだ、今、ホテル、マンション、高層ビルがたくさん建設中だけど、オーナー、偉い人、エンジニアは中国人で、日雇いのカンボジアの労働者は、小さい子供までいるけれど、賃金が安く、儲けているのは中国人だけなんだ」と、こちらが日本人と分かって気を許したのか、経済の発展の陰でその恩恵を受けていないどころか搾取されているらしいカンボジアの労働者の痛ましい現状を語ってくれた。淡々と話す男にしんと黙ってうなずくしかなかった。熱帯の空気がよどんで重く肩にのしかかってくる。

港には、中国語で書かれた船から資材、物資が続々と陸に降ろされていく。建設に必要な資材、備品などあらゆるものを中国は自国から運んでくるようである。もちろん、重労働に耐える荷揚げ労働者はカンボジア人である。

シアヌークビルの街の中にある NGO が運営するレストランに着く。赤く燃えている南国の様々な花の花壇に太陽が溶けている前庭がある。それに面するドアが全て開け放たれた中は、明るい暑かった。四隅に据えられた巨きな扇風機から長テーブルに座った私たちに勢いよく風が送られてくる。

ここには、NGO の「チャイルド・セーフ・ネットワーク」によってスラムから救われた 17 歳から 24 歳までの青少年が数人働きながら料理、サービスのスキル、民芸品の工作を学んでいる。レストランは清潔で掃除が行き届いている。というのも、彼らは衛生、清掃、家具や道具の修理など、健康的で快適な環境を整える教育も受けているからである。NGO の事務官、ソク氏がテーブルの前に立って挨拶をして「チャイルド・セーフ・ネットワーク」について説明してくれる。「シアヌークビルには、スラムがあり、そこに居住している貧困家庭の子供たちは、働かなければならないので学校に行けません。労働搾取、性的搾取を受けている青少年がこの街には、たくさんいます。彼らとその家族をどのように守っていくのがわれわれ組織による活動の目的です」

NGO 活動は、M'LOP TAPANG 運動から始まっている。クメール語（カンボジアの公用語）の M'LOP は「陰」TAPANG は「タパングの木」及び「傘」をそれぞれ意味する。2003 年、少人数の外国人がシアヌークビルのビーチに生えているタパングの木の下に夜間眠っていた 6 人の子供たちに食料を運び、安全を提供した。それが運動のきっかけになった。彼らは、次のような高い使命を掲げている。「社会の弱者である子供たち、若者たち、彼らの家族、コミュニティなどを守ること、これらの全ての青少年たちが尊重され、平等に扱われることによって、よりよい将来を目指す。そのためには、自由に選択できるコミュニティを築くこと」

現在では、具体的には、シアヌークビルの数千人の青少年とその家族に専門的な職業訓練、教育、医療、安全な避難所、食料、カウンセラーなどを提供している。特に、あらゆる種類の身体的乱用、搾取から彼らを守ってあげること、同時に彼ら自身がそれらに気づき、どのように自身を守れるかを学ぶことが最も重要であるとしている。

当時、子供たちを雨風から守ってきたタパングの木が枝を伸ばして成長を続けているように、この組織も活動をより発展させて弱者救済を続けるであろうと決意しているとおり、枝をあちこちに伸ばしている。NGO 活動の「チャイルド・セーフ・ネットワーク」もその枝の一つである。

質疑応答も終わり、昼餐の時間になった。どこからか、ぶうんと食欲をそそるような匂いが漂ってくる。今まで音も立てずに、すぐそばの厨房で働いていたらしい若者たちが、食事のためのテーブルセットを静かにきびきびとした動作でしてくれる。生きるための目的をしっかりと持って日々を励んでいる人特有の落ちついた表情で、柔らかな笑みを浮かべて欲しい飲みものをきいてまわる。接客の教育がしっかりと機能しているのを目の当たりにして組織の意思が感じられた。運ばれてきた一皿ひと皿もその成果を見るおもしろい。した。

大人のシェフの指導によって料理の技を磨いている若者たちがこしらえた魚のスープもちょっと酸味がきいていておいしい。

「魚はこの国を縦断しているメコン川やここから少し離れたトンレサップ湖でたくさん獲れるんだ」と、こちらの問いに、はにかみながら答えてくれたのは初々しい少年である。

メインの料理は、牛肉をトマト、瓜、ハスの茎、いんげん、ブロッコリー、キノコ、玉ねぎなどいろいろな野菜と一緒に煮込んだものである。この国特有の調味料—レモングラス、しょうが、ニンニク、赤カレー、ココナッツミルク、塩、砂糖、タマリンドなどを混ぜ合わせたもの—が牛肉や野菜によくしみこんで甘酸っぱく、少しピリッとしている。普段慣れていない複雑で微妙な風味である。主食のご飯、サラダ菜、フライドポテトなどが添えられていて、豊かな気持ちにさせられた。こんなに贅沢な調味料を使った煮込み料理は、準備に大変な手間暇がかかったのではないかと思う。

ただ職業訓練を受けて頑張っているだけではなく、この色どり豊かな料理皿には、日本流のおもてなしの気持ちがいっぱいあふれていて生涯忘れられない昼食となった。

#### (五) ヴェトナムの特別孤児保護センターを訪ねる

雨にけぶる数千の巨大な、或いは小さな奇岩がぼうっと霞んで屹立しているハロン湾の中を船は進んでいく。或る時は右舷、ある時は左舷、または、両側から突き出している岩々の間をすり抜けていく。辺り一面が、薄墨いろに覆われた水墨画のような風景の中を暫く進んで行く。しかし、次の瞬間、もくもくと空いっぱいに広がっていた雲が裂けて光がふり注いだ。それはまるでここハロン湾に伝えられている神話の龍が舞い下りたようであった。光の中に奇岩を覆っている樹木が、鮮やかに姿を現してまばゆく金いろにきらめいている。し



かし、すぐに再び強く降りだした雨の中をゆっくり2時間かけてカイランの港に入っていた。首都ハノイから165キロ離れている北部ヴェトナムの海の玄関口であり、観光や貿易の要所でもある。

翌朝、カイラン港からバスで約20分かけてヴィンフック州の下町、ホンガイにあるクアンニン省「特別孤児保護センター」を訪れた。

ヴィンフック州は、ホー・チ・ミンの「独立と自由ほど尊いものはない」という思想を指導理念として掲げている。ヴェトナム社会主義共和国憲法の下で市場経済を容認、推進している。ヴィンフック州政府は、この州をより美しく文明化された地域として建設すること、国民のために貢献することなどを謳っている。特に、子供たちの教育に力を注いでいるようである。ちなみに、ヴェトナム全国の識字率は96%にも上ると言う。

ドイモイ（刷新）政策を推し進めてから、アジアの中でも経済発展がひときわ著しい。アメリカとの国交回復も果たしたヴェトナムだが、10年以上続いたヴェトナム戦争は、まだ決して遠い過去ではない。戦中はいうまでもなく、戦後も、今日まで甚大な被害がヴェトナム国民にもたらされてきた。

今回の船には、ジャーナリストで日本を拠点として活動しているジョン・ミッチェルが乗船され、二つの講演を行った。一つ目の講演「ヴェトナムのアメリカ戦争、日本と憲法9条」（2018・4・18及び、彼の著書、「追跡、沖縄の枯れ葉剤」）によると、米軍によって10年間に南ヴェトナムに大量の除草剤（主要な成分は発がん性のダイオキシン）が撒布された。その除草剤被爆によって、今でも300万人のヴェトナム人、及び数十万人の米兵が苦しんでいる。当時、食料生産地が標的にされた。それによって、米を中心としたメコンデルタの3億キロの食料生産が壊滅し、田畑は不毛の泥沼となった。この先何十年も回復のメドが立たない汚染された土地が、いまだにヴェトナムには残存している。

また、米軍の爆撃機によるヴェトナムへの爆破は、広島に投下された原爆の640発分に当たる。

この国のほぼ真ん中にある「基地の町」として知られていたダナンには、被害者支援センターがあり、ピースボートは活動の一環として救援を行ってきた。

朝、まだ早いのにバスを下りて下町らしい狭い道を暫く上っていくと汗がふきであるような蒸し暑さである。両手にずっしりと重い紙袋を持っているせいかもしれない。文房具、衣類、本、スポーツ道具など、ピースボートから子供たちへのおみやげである。

州政府が運営しているクアンニン省「特別孤児保護センター」は、広々とした敷地内にあった。1992年に建てられ、26年間経過しているというが、それほど古くは見えない二階建ての建物である。

一階の集会室の真ん中から後方には、すでに数十人の男女の子供たちが行儀よく座って私たち数十人を迎えてくれる。前方に座ると、にこやかに有能そうな女性のセンター長が、この保護センターについて説明を始めた。

「設立当時は、ヴェトナムの他の都市と同じように、この街にもストリートチルドレンがあふれていました。現在まで、ここで2000人以上のそのような子どもたちのお世話をしてきました。今、36名のスタッフで7歳から21歳までの青少年を支援しています。その中には、36名の家族がいない拾われてきた子供たち、近隣のアジアに売られて連れ戻された子供たち数名、聾啞者41名がいます。この施設はヴェトナム政府の支援を受けています。国際条約に則って子どもたちの命は、安全を保障されています。ここでは、一人ひとりの役割が決められています。子どもたちは、きちんと仕事をこなしながら規則正しい日常生活を送っています」

その後、案内してもらった施設には、クラスルームがいくつかあった。勉強しながら13歳以上の子どもは、専門別に世間に出てから役に立つ職業訓練を受けている。バイク、自転車や建造物などの修理、修復のスキルを磨き、料理、裁縫、絵画、手芸などの分野でもプロを目指している。度々展覧会を開いては作品を売っている。今回も手芸品、絵画が多数展示されていたが、将来のアーティストへの道につながっているようなものもあった。ヴェトナム風の衣装をつけた女の子たち、風景画が特に売れ行きがよかった。

二階には、身体を病んでいる子、苛酷な過去の生活で脳にダメージを受けている子、心を病んでいる子どもたちの病室がある。過去の境遇がそれぞれ違う子どもたちが、楽しく遊べるようにスポーツ、音楽、ダンス、観光などにも力を注いでいる。国内、国際（日本も含めて）支援を受けてここの施設のインフラ、食事の内容が大幅に改善されたそうである。ピースボートも東南アジアにあるこのような施設を訪れては、おもちゃ、絵本、スポーツ用具、衣類、文房具などを持っていく。その度に子どもたちの笑顔に迎えられている。

世界平和のための一役をになっているのである。

ここでの子どもたちへの情操教育の成果は素晴らしかった。私たち日本人を歓迎して歌い、踊ってくれた子どもたちは明るく、楽し気で、羞恥心をたたえて顔いっぱい笑っていた。きっとここでの、仲間たちと学んだり、遊んだりする希望に満ちた生活は、辛かった過去を忘れさせてくれるのであろう。

今でも臉にうかんでくるのは、無限にやさしく、美しく、シンプルなメロディーのヴェトナムの歌を伴奏にして黄色、黒のスカートをひるがえして、手に大きなピンク色の扇をひらひらさせて踊ってくれた14、5歳の数人の愛らしい女の子たちの容や、恥じらいを浮かべて甘く、切ないメロディーのヴェトナムの歌を一心に歌ってくれた幼い女の子などである。また、それに続いて、魂

の奥底までひびく民謡と共に愛嬌たっぷりのジェスチャーをしながら踊ってくれた5人の女の子、2人の男の子たちの姿も忘れられないものとなっている。あなたがたの「未来をしっかりと生きていこうという意志」を私も心にしっかりと受けとめました。ガムン、ガムン（ありがとう）

その後の90分の子どもたちとの交遊は瞬く間に過ぎてしまった。

言葉でコミュニケーションができない聾啞の女の子たちに日本の施設でボランティアをしている二、三人の女性たちが折り紙を用意してきている。その回りに群がった女の子たちが目を輝かせて教えてもらっている。すぐにテーブルの上には、黄、赤、白、青色など様々な色の日本人形、バレリーナ、動物たち、船などが並べられていく。飽きることなく熱心に器用な手つきで折り紙を折る彼女たちは、お祈りを捧げている聖女のように無垢である。不器用な私に辛抱強く喜々として習ったばかりの折り紙を教えてくれる子も何人かいる。日頃から年下の子どもたちの世話をやいているのだろうか。

窓から、広々とした庭で大人と男の子たちが歓声を上げてボールを追ってかけずりまわっているのが見える。

言語が通じない大人と子どもたちが無心に一緒に遊んでいる風景が、新鮮に感じられた。もう、大人とか子ども、聾啞者とか健常者、家族がいるとかいないとか、日本人とかベトナム人とか、などの垣根がすっかり取り除かれたような気がした。

「みんなむかしからのきょうだい」（宮沢賢治詩、青森挽歌）とか、「あらゆる生物にほんとうの幸福をもたらしたい」という宇宙意志を謳った宮沢賢治の世界が霧のむこうから微かに垣間見えた瞬間であった。

## エピローグ

初めてアジアの数か国をピースボートで訪れた。クルーズディレクター、戸田良明によると、35周年記念としてピースボートの原点である「アジア」への旅が、今回、計画された。「このアジアグランドクルーズは、ピースボートが35年間持ち続けているスローガン「過去の戦争を見つめ、平和な未来を考える」をまさに体現するクルーズだったと私は思います」と、戸田良明が述べておられたが、この度、現地を実際に訪れて、私はアジアの様々な人や歴史、文化と出合いを重ねることが出来た。

それだけではなく、船上での講演を通じてよりいっそうアジアを理解できたと思う。

初めに述べたように、今までアジアに関心がなかったが、それには理由がある。前回のエッセイに書き記したように二つの大学では、国文学とスペイン文学を学んできた。それほど熱烈に文学が好きなのである。

幼少の頃、母は、青少年向けの世界文学作品をたくさん読ませてくれた。「アラビアンナイト」(千一夜物語)以外は欧米文学がほとんどであった。その頃から特に、ヨーロッパに魅かれてきたのである。アジア文学は読んだ覚えがない。成長してからも同様である。私の場合は、当然のこととして文学を通して外国に興味を持ち、その国を知りたいという欲求がわいてくるのである。

しかし、今回のアジアへの旅では、アジアについて何にも知らないではすまされない、と思いつり、旅の前、旅の間、終了した現在も猛烈に勉強している。過去のアジア、及び、現在のアジアが直面している様々な問題を知れば知るほど胸に痛みを感じるようになった。今まで無意識に見たくなかったものを封印してきた箱を開けてしまったような気がしてならないのである。

オランダ、イギリス、フランスなどの当時の列強から何世紀にもわたってアジアは、植民地化された。(タイは、一度も植民地になったことはない。第二次大戦中の旧大日本帝国の下で、日本が植民地支配をした近隣のアジア諸国、及び千年以上中国により支配されてきたヴェトナムもここに含まれる) また、10年にわたるヴェトナム戦争により東南アジアは、毒物で汚染されるという暴虐を受けてきた。また、独立戦争、内乱などの経過をたどって多くの住民、女たち、子どもたちの血を流し続けている。外国からの植民地化、干渉の根底には、東洋人に対する人種差別があるようである。ジョン・ミッチェルの著書(追跡、沖縄の枯れ葉剤)の中に、ヴェトナム戦争の指揮を執った米軍のウェストモランド陸軍大将の「東洋では命は有り余っており、安上りなのだ」という言葉がそれを的確に言い表している。

船上でピースボートの野平晋作が「歴史認識とアジアの中の日本、反日という誤解、親日という幻想」(18・4・4)というテーマで話された。一般の日本人は、植民地支配について何故いつまでも日本だけが非難されるのか、他の西洋諸国も反省していないのではないか、という疑問を持っている、というところから始められた。

その答えは、大日本帝国憲法、日本近現代史を研究しておられる倉山満の著書「国際法で読み解く戦後史の真実」の中にあると、私は思う。「国際法を理解しているのか怪しい、アメリカ。国際法を理解したうえで破る、ロシア。そもそも法を理解できない、中国。そもそも人の道を理解できない、北朝鮮。そうした国々に囲まれて、「日本」は国名ではなく地名にすぎなくなっています。周辺諸国が核兵器を手に激しく火花を散らす中、右往左往するばかりです」著者は、国際法(最初は、キリスト教国間のヨーロッパ公法で現代では、宗教に関係なく文明の法として守るべきものとして確立している)を通じてこのよう

に現代史を分析していく。

ヨーロッパは、15世紀に始まった大航海時代以降、競うようにアフリカ大陸や南北アメリカを植民地支配していく。何故なら、先住民しかいない土地に最初に到着したヨーロッパ人は、その土地を自国の領土に出来るというルールがヨーロッパ人の間にあったからである。そればかりではなく、侵入した土地に勝手に国境線を引くという暴挙まで行ってきた。例えば、300年にわたってインドを植民地支配したイギリスは、インドを去る前に、国境線を引いて二つの国に分割した。それによって死者、100万人、難民1500万人を出している。

幸運にも、日本がヨーロッパから植民地化を免れたのは、倉山満によると、江戸幕府が国際法を武器にしたからである。明治維新にかけて当時の日本人が戦時国際法を理解して順守し、その適用を諸列強に認めさせたからだという。

日本人が国際法を理解していたというのは重要であると思う。しかし、第二次世界大戦に敗れ、国際法秩序の最後の番人の地位から日本は降りてしまったと、著者は述べるが、そうではない。現在でも法の支配を順守し、それを徹底させようという安倍首相の決意が「インド太平洋戦略」に見られるのである。それについては後で説明することにする。

同著者によると、第二次世界大戦でアメリカは日本に対して二重の国際法違反を犯したという。一番目は、民間人の虐殺を目的とする焼夷爆弾撃による日本中の無差別都市空襲。二番目は、広島と長崎に落した二発の原爆である。それらの都市の無差別都市空襲及び、非人道的兵器使用という二重の国際法違反である。それなのに、2016年5月に広島を訪問したオバマが、謝罪しなかったことは、記憶に新しい事実である。

あの時、オバマが謝罪しなかったことに世界のどこかの国がアメリカを非難しただろうか、日本ではどうであろうか。日本人はオバマが被爆者に謝罪せずただハグしている映像のシーンを見て感激していたのではないか。

すでに述べてきたように、アメリカはヴェトナムに対して全く同様な二重の国際法違反を犯した。B52爆撃機による非戦闘員である民間人の殺戮。1968年のソンミ村の大虐殺など記憶している人もいるだろう。そして、非人道的化学兵器の使用。多種類の毒性の強い化学物質と除草剤（枯れ葉剤—エージェント オレンジ）が上空から撒布された。ヴェトナムはそれらの毒物の実験室にされたとまで言われている。何百万人というヴェトナム人が現在でも除草剤被爆で苦しんでいるのに、米国政府は援助を拒否している。先に引用したジョン・ミッチェルの著書にでてくるトラン・ゴック・トー少将（ヴェトナム枯葉剤・ダイオキシン被害者の会、ホーチミン市支部代表）の言葉によると、「それを認めれば、ハーグ国際司法裁判所に引き出されて戦争犯罪者として裁かれるからでしょう」

このように、徹底的に国際法が無視されたヴェトナムは、6月11日(2018年)に開幕した国際交流会議「アジアの未来」で、ヴェトナムが世界に提唱したいことは国際法と世界貿易機関(WTO)原則の順守だと強調した。チュオン・ホア・ビン副首相は紛争の火種となりかねない東シナ海、南シナ海の最近の状況は安全への脅威が増していると憂慮を示した。

国際法を理解しようとしめない中国は、南シナ海に次々と軍事拠点を作ってアジア周辺諸国を脅かしている。2016年に安倍首相が打ち出した「インド太平洋戦略」は太平洋とインド洋にまたがる地域で、法の支配や市場経済などの価値を共有する国々が協力する構想である。首相は、すでに東南アジア諸国に巡視艇などの供与や人材育成の支援をしている。海上での法の支配を徹底し、アジアと中東を結ぶ海上交通路を防衛するという構想は、まだ日本が、法の支配の番人であろうとしているからである。

「第二次大戦後の現代史の野蛮さは、国際法を理解できないアメリカとそれ



を理解して破るソ連（ロシア）が覇を競いあったからであると、前述の倉山満はいう。そして、周知の事実として、ソ連は日ソ中立条約を無視して対日参戦し、ポツダム宣言受託後にも攻撃を続けて北方四島を不法占拠した。これは、まさしく国際法違反であり、野蛮行為そのものである。

重大な「国際法違反」を犯してきた戦勝国や植民地支配を何世紀にもわたって行ってきたその他の西洋諸国が、第二次大戦中の日本の植民地支配を非難する資格があるのか、と私は問いたい。

日本は、日中間の関係改善のために、1978年10月23日、日中平和友好条約を締結した。「政府開発援助、ODA、1979年開始」を通じて40年間、中国に資金提供、技術援助を行ってきた。1978年10月に前述の条約批准書交換のために日本を訪れた鄧小平副首相は、松下電器産業の松下幸之助に「中国の近代化のために、お手伝いいただきたい」（10月28日、松下の茨城工場を視察）と言った。25日の日本記者クラブでは、「（日本に）30年の後れをとった。・・・お国も含めて教育してもらわないといけない」と当時の日本記者クラブ副理事に語った。

このような経緯で、日本は中国に大型インフラ整備、技術援助、及び、円借款も含めて、有償、無償資金提供併せて、3兆6億5千万円以上の資金協力を行ってきた。医療関係の無償資金協力によって、中国には、病院が建てられた。中国のために日本が行ってきた様々なこのような援助は、中国の一般市民はもとより、日本でさえもほとんど知られていないのが現状である。内外で喧伝されているのが、日本は、アジアの植民地支配の暴虐に何ら反省していないということばかりである。

中国に対する援助は、今年度（2018年）で終了することになった。中国は、日本を追い抜いて世界第二位の経済大国になったからである。

今後は、日中間のより一層の改善を進めるため開発協力対話を行なうとして

いる。

船上での講演（18年4月2日）で「先進国が先に地獄におちている」と安富歩東大教授が警告を発した言葉を裏書きするような深刻な事態が起こった。カナダで2018年6月8日～9日に開かれたG7が分裂の危機に立たされたのである。

それについては、日経新聞（18年6月12日）が次のように警鐘を鳴らしている、「自由と民主の旗を振り、同じ価値観を共有して世界を主導してきたG7が、トランプ米大統領により分裂の危機に立たされた。日米欧が結束して国際社会の合意形成を主導する意義は大きい。G7の分裂は強権的な指導者の下で既存の秩序に挑む中国やロシアにつけ入る隙を与える。G7がこのまま漂流し、統制国家の集合体にとって代わられるのは困る」

本当に困ると、私も思う。すでに見てきたように、中国やロシアは国際法による世界秩序を破壊してきた。G7をないがしろにするトランプ米大統領の逆走で今回のサミットが混沌の淵に突き落とされていちばん喜んでいるのが中国とロシアであろう。「アメリカは敵と味方を間違える天才だった」と倉山満が指摘するように、アメリカは今、同盟国関係を破壊しようとしている。そういうアメリカを信頼できないと、欧州の国では徴兵制度が復活している。

現在、アジアが直面している問題の一つは少数民族が迫害され難民になっているということである。

ここでは、船上の講演で取り上げた少数民族だけについて述べることにする。ファウジア・ハサン先生の講演を二日間（18年3月25日、26日）続けて拝聴した。一日目は、医師であり、人道活動家のハサン先生が世界各地で行ってきた人道支援についての話しであった。

例えば、自国、マレーシアから遠く離れた紛争地域コソボで1999年、「移動

する病院「オープン・エア・クリニック」で医師及び、看護師として支援するだけではなく、料理から掃除まで何でもコソボの人々を助けるためにしてきた。ただ、人類に貢献したいという思いからであった。先生の人道支援の基本的な姿勢は「患者に尊敬を持って接すること」と「魚ではなく釣り竿を与えること」である。

また、トルコに逃れてきたシリアの子どもたちや、陸、海、空が封鎖されてスペインから地中海を横断してきたガザの「女性の船」などを支援してきた。その他、いろいろな支援活動を行ってきた。いつも心にきざみつけているのは、キング牧師の「他人のために何がしてあげられるか」マザーテレサの「宗教や国境を越えて他人のために良いことをする」そして、マンデラの「いつもやってみるまでは不可能に見える」などの言葉である。

二日目は、「ミャンマーのロヒンギャ危機について」を話された。バングラデシュに逃れてきたロヒンギャ避難民の支援を長年にわたって続けておられる。先生の説明を要約すると「ミャンマーは、135の異なった民族で構成される多数民族国家でビルマ人が、ミャンマーの支配勢力である。ロヒンギャはその中には含まれていない。仏教徒88%の仏教国の中でわずか4%のイスラム教徒である。地理的には、バングラデシュとの国境近くに住んでいた。以前は参政権も国籍も与えられていたが、ミャンマー国民ではない、バングラデシュから入ってきた不法入国者だと非難されるようになったのが、1982年の市民権法によってである。この法でロヒンギャは正式にミャンマーの非国民となり、国籍が剥奪された。80万人が世界各地に逃げていったが、20万から30万人が国内難民となった。ミャンマーでは、不法滞在者と見なされているので移動の自由は制限されている。子どもたちは教育が与えられない。また、十分な食料が届かず栄養失調に陥っていった」

先生は、バングラデシュのコックス・バザール (COX BAZAR) という避

難民キャンプで支援活動をしている。「そこは蚊の多い湿地地帯で気温も高く、ミャンマーから歩いて逃げてきた難民でいっぱいであった。劣悪な環境の下で避難民はじかに地面に寝ていた。水飲み場がトイレに近く設置されていたので子どもたちは常に下痢をおこしていた。病院は遠方にあり、すぐに駆けつけることは出来なかった。ミャンマーからは、まだ多くのロヒンギャがここに逃げて来る。現在は、キャンプは以前より少し改善されている。衛生面でも良くなってきている。また、女性だけの部屋ができて、女性たちは安全に保護されていると感じている。以前は、うつ病になる女性が多かった。妊娠している若い女性たちを診察するために、屋外に設置された診療テントには、カバーがつけられるようになった。ムスリンには、大勢の子どもたちが生まれると、仏教国ミャンマーは怖れている。これもロヒンギャ迫害の理由の一つとなっている」

「ロヒンギャ危機」には複雑な要素が絡まっている。歴史的にみると、1826年以降の英領植民地時代に「ラカイン（ミャンマー西部ラカイン州）仏教徒」対「移民イスラム教徒」という宗教、民族間の対立構造が国境地帯で生まれ、今日の差別、迫害にまで拡大したのである。第二次大戦中、日本軍の進軍により失地回復したラカイン人は、ビルマ軍に協力してロヒンギャの迫害と追放を開始した。

先に先生が触れたように、1982年の市民権法でロヒンギャの多くは、無国籍者となった。現在のミャンマー政府は、ロヒンギャが改めてミャンマーへの帰化を申請しても認めないという原則を取っている。認めるのは135民族に限っているからである。

軍事政権下、ロヒンギャはアウンサンスーチーらの民主化運動を支持していた。軍事政権はロヒンギャに対して強烈な弾圧を行ってきた。その度に大規模なロヒンギャがバングラデシュに難民として流出した。国際的な救援活動が届

かず多数のロヒンギャが死亡した。

アウンサンスーチーは、軍事政権が民政に移管してから6年も経過している2017年、欧州連合（EU）の代表と会談し、国際調査団の受け入れ拒否を表明し、外国メディアの取材制限についても理解を求めている。ロヒンギャはこのようなアウンサンスーチーに対して失望と不満を感じている。

2012年には、ロヒンギャ・ムスリムとラカイン・仏教徒間で大規模な衝突が起こっている。多数のロヒンギャが殺害された。ミャンマー側では従来通り、ロヒンギャは自国の民族ではなく、バングラデシュからの不法移民であると表明している。同様に、バングラデシュでは、いつものように難民、不法移民として扱っている。南東部にある劣悪な環境にある仮定住キャンプにミャンマーから脱出してきた多くのロヒンギャが暮らしている。

2016年、2017年の「ロヒンギャ危機」は今まで以上に大規模である。ヒューマン・ライツ・ウォッチの衛星画像の分析によると、数千軒のロヒンギャの住居がミャンマー軍により焼かれているという。

国連の事務総長は「ロヒンギャの3分の1が国外に逃れているということは、ミャンマー政府による民族浄化である」また、国連の特別報告書でも「人道に対する罪の可能性が大きい」とミャンマーを非難した。

人権団体、アムネスティ・インターナショナルも衛星写真を分析した結果「計画的にロヒンギャの居住地区や村を狙って放火が行われている、数万人が家を失っている」と表明した。それらに対して、ミャンマーは国連調査団、各種団体、外国報道機関の現地訪問を拒否したり、制限したりしている。

国連の総会で何回か、ミャンマー政府に対して軍事力行使の停止などを求めた決議案をだしたが、ミャンマー、中国、ロシア、シリアなどが反対し、日本は棄権している。すでに述べたように「国際法を理解できない」中国やロシアが反対するのは分かるが、日本が賛成するのではなく、棄権しているとはどういうことなのか。日本は中立を装っているのだろうか。しかし、一方では、日

本政府はバングラデシュに逃れている避難民を支援する緊急資金協力を表明している。

現在（2018年）ロヒンギヤの80万人以上の難民の中、バングラデシュには、約70万人がいるとされる。タイ、マレーシアなどの周辺諸国はロヒンギヤを難民として認定せずに経済移民視している。それらの国では、労働許可証がないと不法入国者として罰せられる。

ピースポート事務局が「迫害を受ける少数民族の今—東南アジアからの報告」（18年4月10日）というテーマでミャンマー、フィリピン、タイの少数民族が現在置かれている状況を話された。ここでは、タイの少数民族、パタニ出身のハサンの証言を紹介しよう。

ハサンは精悍な感じの若い男性で「平和のための市民団体」に所属している。「パタニ（現在、パッターニ県はタイ王国南部の県の一つになっている）は、14世紀には、パタニ王国という独立国家でありました。タイが4つの州に分断された後、パタニ王国はなくなりタイのものとなりました。パタニ王国消滅直後から独立運動が盛んになりました。何故なら、タイ政府はパタニ民族に対して良きタイ市民になるように同化を求めているからです。タイ民族主義を掲げてタイ文化様式に従うように強制しています。2004年、1月には、武力衝突によってイスラム系リーダー70名が逮捕され拷問を受け殺害されました。その年から現在まで戒厳令が敷かれ、人権の侵害が行われています」

ハサンの証言には、パタニ自身のアイデンティティを拒否され同化を迫られているという苦悩がにじみ出ている。

しかし、ここにも民族主義問題以外にも宗教の問題があることが分かる。タイは仏教徒94%の仏教国である。パッターニ県はマレー半島のタイランド湾側にあり、マレー人が多く住みながらもタイの一部となっただけのいきさつがある。イスラム系の住民が多いのである。現在、タイには、わずか5%のイスラム教

徒がいる。タイ政府にとっては、その少数のイスラム教徒が目ざわりなのだろうと、思う。

ミャンマーやタイは、ロヒンギャとパタニをテロリストのイスラム教徒であると世界に思わせようとしているが、本当のイスラム教徒は決してそうではない。私の好きなアルゼンチンの詩人、ボルヘスはコーランを評して「コーランはアラビア語で書かれているけれども、イスラム教徒たちはそれを言語以前のものとして考えている。彼らは、コーランを神の御業ではなく、神の正義、慈悲、知恵などの一切がそうであるように、神の属性の一つと見なしているそうである」という。

イスラム教徒は聖典「コーラン」を幼少の頃から暗唱して自分の血肉としている。他の宗教を強要されるということは、彼らにとって自身の存在全体が抹殺されることを意味するのであろう。

最後は、「アジアの未来」というテーマで締めくくりたい。

6月11日(2018年)に日本で開幕した国際交流会議には、日本、マレーシア、韓国、ヴェトナム、シンガポール、中国、米国、その他、インド太平洋の周辺国が集まった。

安倍首相は、インド洋と太平洋をまたがる地域のインフラ整備に向けて今後3年間、官民で約500億ドル(約5兆5000億円)を投融資する仕組みをつくと表明した。更に、翌12日の歴史的米朝会談の後の半島情勢の好転を期待した。

首相によると、日本は新しいプログラムを始める。国際協力機構(JICA)と日本各地の大学が手を組むことになった。2018年以降、アジアやアフリカなど途上国の将来を担う若者2000人ほどを日本に招聘して学ばせ、学位をとってもらおう。いつも2000人ほどが日本で学んでいるという状態を5年くらいをメドに実現する。

首相は、未来を生きる日本とアジアの若者たちに自由と平和、法の支配と繁栄を享受してもらいたいと強調した。

各国首脳・閣僚らが表明したことは、次のような点である。アジア太平洋地域の持続可能な成長と繁栄のためには、世界の平和と安定が重要である。

その実現には、世界貿易機関、国際連合などの国際機関のサポート、人的、文化的交流の促進、オープンで連携した世界に向かって歩む相互責任などの原則が必要とされる。

アジアには、高・中・低所得の国が共存している。共存は難しいともいえるが、それはアジアの多様性を意味している。多様性が寛容の精神と革新を生み出すのである。それにより、未来のアジアは飛躍的に発展するであろう。

今、こうして「アジアへの巡礼の道」をふりかえって見れば、けわしく受難の道をたどってきた過去のアジアに鎮魂の祈りを捧げている私が、ここにいる。

現在、簡単に解決を見いだせそうもない課題に直面しているアジアだが、一方では、未来のアジアの発展のために経済統合、国際法順守などにより互いに協力し合っているポジティブなアジアがいる。

日本ができるのは、資金と教育・技術を提供することにより未来のアジアに投資することであろう。

祈る気持ちでこれからのアジアを見つめていきたい。



## 参考文献

国際法で読み解く戦後史の真実。倉山満。Php 新書。東京。2017年。

追跡・沖縄の枯れ葉剤。ジョン・ミッチェル高文研。東京。2015年。

グローバル時代のアジア地域統合。日米中関係と tpp のゆくえ。羽場久美子。

岩波書店。東京。2012年。

ピースボート 35 周年の歩み。井上直。ジャパングレイス。2018年。

地球の歩き方東南アジアタイ・マレーシア・シンガポール・ベトナム・ラオス・カンボジア。ダイヤモンド・ビッグ社。2016年。



ミャンマーの女性たちと筆者



PEACE BOAT



PEACE BOAT

## **2. EN EL CAMINO DE LA VERDADERA PAZ.**

(Ensayo desde una hermenéutica cristiana)

Por Bernardo Villasanz

### **INTRODUCCIÓN**

La paz en un mundo amenazado por las armas nucleares parece ser contemplada y entendida en general como un intervalo entre dos guerras o conflictos en el campo de las relaciones internacionales. Es una concepción de la paz negativa: ausencia de violencia o conflicto ya sea de violencia personal o violencia socioestructural. La paz no es sólo ausencia de guerra sino que implica aspectos positivos tal y como el respeto a la dignidad de las personas y de los pueblos.

Se considera en general desde un punto de vista estrictamente humano que la guerra es provocada por un hecho discordante en las voluntades de las personas, grupos o naciones, creyendo que se llegará a través de tratados a una paz más perfecta poniéndose así fin a situaciones defectuosas e injustas. Suele incluso hablarse de las relaciones internacionales desde una perspectiva pesimista antropológica como de un “teatro bélico de operaciones permanentes”.

De esta manera según las bases ideológicas imperantes se sostiene que la defensa de los mismos valores legitimarían el recurso a la guerra. Así en el orden actual los principios de la democracia y los derechos humanos sustentarían la tesis paradójica de legitimar el uso de la fuerza para defender la paz democrática.

Pero también es válido hacer referencia a la guerra desde una hermenéutica no sólo política sino religiosa. Podría contemplarse la guerra también como un desorden que ha roto la armonía entre la Paz de la Voluntad Divina y la voluntad humana. Algo que procede ciertamente de la injusticia y la agresión entre diferentes partes que sostienen principios contradictorios y que al revelarse entre sí pueden chocar contra la Justicia Divina a la que es necesario satisfacer.

Según esta manera de pensar la guerra podría ser un castigo divino porque no hay medio más potente para que los seres humanos entren en razón que el verse deshechos ellos mismos como consecuencia de sus actos. Dios deja que los hombres decidan de acuerdo a su libre albedrío respetando su voluntad de decisión.

Encontramos en el plano sobrenatural la actitud aparentemente paradójica de la misericordia y la justicia divina. Cuando la justicia divina se ve llena de iniquidades de las criaturas de modo que no puede contenerlas dado el cúmulo de ofensas entonces se ve obligada a mandar flagelos para castigar. Esto produce el dolor humano del amor misericordioso en conflicto con la necesaria satisfacción de la divina justicia ante la aparente “paz humana”.<sup>(1)</sup>

Nadie desea la guerra pero rehuirla por principio puede ser considerado cobardía ante una situación injusta e insostenible. Toda paz verdadera como ideal debe ser la obra de la justicia que es algo totalmente diferente a un pacifismo conformista que se desinteresa del bien común.

Sucede que cuando hay injusticias es porque la hipocresía se ha

instalado ocultando la verdad. La Verdad es hija de la Justicia que no puede engañar ni ser engañada por lo que *la persona que se mantiene en la verdad y la justicia* con suma simplicidad y rectitud de intención trabaja por el fruto de la Paz verdadera. Sin el estado pacífico no pueden entrar las verdades pues en la paz está la señal de la inmutabilidad en la que no hay cambio del bien al mal. El carácter pacífico es firme y constante. Esto se consigue en el cristianismo en el estado de *gracia santificante*.

Nos encontramos usualmente ante un poder siempre cambiante que nunca tolera un criterio objetivo del bien y del mal más allá de lo que quiera legislar según la jerarquía de valores imperantes. Y esto porque fácilmente los seres humanos creen ser dueños de una fuerza y de un poder propios que les hace olvidar de que tales dones provienen de Dios. Esta actitud engreída es nefasta y lleva a la destrucción.

En el espíritu belicoso suele estar instalada la actitud de soberbia (el sacar pecho, hacerse el fuerte...) que trata de ocultar en realidad una actitud de cobardía e incapacidad confiando desmesuradamente en los propios recursos. La persona belicosa desprecia la existencia como un regalo divino sin tomar conciencia de que todo es un don.

Ser valiente no quiere decir no tener miedo sino en aceptar la propia limitación con un fundamento basado en la fortaleza de la fe. Y si bien aquí se parte de la fe cristiana considerada como la verdadera fe custodiada por la Iglesia Católica teniendo en cuenta ciertos aspectos analógicos (“analogía de la fe” cf Rm 12,6) se reconoce una especie de camino común con las diversas creencias religiosas. La fe como conjunto de creencias puede reflejar según las diferentes religiones destellos de la Verdad que ilumina a todos los seres humanos, aunque sea de una manera imperfecta.

La persona que verdaderamente busque la paz reconocerá la unidad y dignidad de todos los hombres pues hay un fundamento común : hechos a imagen y semejanza de Dios.

Como expresión declarativa de nuestra tesis se sostendría pues que desde el paradigma cristiano *sin el principio de la gracia santificante como valor sociocultural no puede existir paz verdadera* porque la ética cristiana se basa en la idea fundamental de que este principio gobierna tanto la dimensión humana como la sobrenatural. No podemos ir contra la Ley de Dios más bien sólo podemos ir contra nosotros mismos cuando pretendemos guiarnos por leyes humanas que claramente intentan suplantar a las divinas.

---

Desde el paradigma cristiano *sin el principio de la gracia santificante como valor sociocultural no puede existir paz verdadera*, a lo más podría hablarse de una paz humana imperfecta y transitoria, pero no perfecta y estable. Y esto es así porque existen Leyes naturales y sobrenaturales inmutables que no pueden violarse impunemente.

---

Sin necesidad de muchas argumentaciones teóricas el principio de la gracia santificante es la Paz misma, esto es, Dios que mirándose a sí mismo en las criaturas creadas perfectas se ama y se da a Sí mismo en el Amor.

Más concretamente:

*“La gracia es poseer en vosotros la luz, la fuerza, la sabiduría de Dios. Esto es poseer la semejanza intelectual con Dios, el signo inconfundible de vuestra filiación con Dios”.*

*(Los Cuadernos. 1943. Maria Valtorta.pág.50)*

Decir que la gracia santificante es un principio fundamental quiere significar que es una verdad profunda, de aplicación universal. Cuando esta verdad se internaliza en el sistema de la personalidad como ACTO otorga el poder de crear variedad de prácticas para abordar y discernir diferentes situaciones.

Si un sistema cultural de una sociedad adopta como pauta valorativa el principio correcto de la gracia santificante como algo que contribuye al bien común y la paz social, puede decirse que se guía por un principio correcto, tiene la verdad.

La paz verdadera como fruto de la gracia santificante apela a la exigencia permanente de un *camino de conversión interior permanente* en la identidad personal como identidad social para poder obtener cambios estructurales. También supone el deber de introducir en las instituciones y en los procesos de socialización las mejoras necesarias que favorezcan el bien común y la justicia.

Bien común quiere decir respeto a la persona y sus derechos, bienestar social y desarrollo para conseguir la propia perfección y la estabilidad y seguridad de un orden justo. La verdadera paz es un elemento esencial del bien común.

Este cambio de actitud necesaria en el camino a la conversión es una transformación de la persona que hace iluminar en nuestras conciencias el fenómeno del "pecado" (*errar el blanco*) considerándolo como una actitud que se autoatribuye algo que no le corresponde: el derecho a poder decidir por sí mismo sobre los principios de la vida creyéndose autosuficiente. Actitud irracional que inclinándose a la desarmonía y al desorden va contra

la recta conciencia. Un abuso, en suma, de la libertad que Dios da a las personas creadas que impide el amor al Creador y al prójimo.

## LA VERDADERA PAZ COMO CAMINO

LA PAZ ES UNA REFERENCIA CONSTANTE en todos los ámbitos de la vida humana porque en sí misma es algo con un sentido tan valioso que su asimilación y puesta en práctica tanto a nivel cultural como social e incluso personal puede hacer del mundo un lugar mucho mejor para vivir. Y esto es así porque la concordia y armonía pacífica además de mejorar la calidad de vida, ser un signo de bienestar y felicidad, enmienda una terrible injusticia: la Guerra.

“COMO CAMINO” se utiliza aquí de forma alegórica para expresar la similitud entre el viaje a un lugar sagrado y el camino de la vida humana. Este significado alegórico de la peregrinación lo encontramos en la mayoría de las creencias religiosas como camino de perfección y metáfora de la vida. Específicamente desde una hermenéutica cristiana el camino ya se nos ha revelado plenamente en Jesucristo pues no somos inventores del camino de la paz humana sino descubridores. No podemos pretender abrir un nuevo camino de pacificación hecho a nuestra medida diferente al trazado por un Jesús histórico aguando el Evangelio según las diferentes glosas e interpretaciones personales.

En este sentido hay un criterio de historicidad con argumentación racional de múltiples fuentes, de continuidad, conformidad y explicación necesaria que no pueden ignorarse en aras de un relativismo.<sup>(2)</sup>

Humanamente la paz suele ser entendida y definida positivamente como

un estado de equilibrio y estabilidad a nivel social. En el plano colectivo “paz” es lo contrario a la “guerra”, una paz humana siempre imperfecta y temporal que en los conflictos internacionales y a través de convenios o tratados suele poner fin a una situación bélica. En este sentido “paz” y “guerra” son términos excluyentes y no se entiende que pueda existir paz en la guerra.

Así pues la paz mundial es una de las motivaciones más poderosas que existen por la sencilla razón que si la paz no existiese el mundo iría a peor, los conflictos sociales, las injusticias, la violencia y el terrorismo serían la tónica dominante.

Es habitual capitalizar la pasión a favor de la paz y en contra de la guerra resultando una polarización en la que o bien se ama condicionalmente o se la critica sin piedad.

Dado que la paz suele entenderse como el sosiego y buena correspondencia de unas personas con otras, tanto si se está a favor como en contra de la paz la realidad es que los seres humanos son los verdaderos artífices de ella. Hay un gran precio que pagar pues dado que hay muchas vidas en juego su valor es incalculable.

“LA VERDADERA PAZ” no se refiere únicamente a la ausencia de guerra sino que entre otros aspectos pone especial énfasis en el respeto de *la dignidad de las personas* practicando en la medida de lo posible la solidaridad.

Desde una hermenéutica cristiana que ahondase en el lenguaje simbólico se pondría especial énfasis en la dimensión existencial del ser humano como una “*coexistencia*” sin eludir la dimensión sociocultural. La vida humana es un coexistir con otros en la vida cotidiana que se efectuará según se hayan internalizado los valores de las creencias del sistema cultural al que



pertenezca. Esto incluye la relación del sujeto con el mundo y su cosmovisión (dimensión sobrenatural), esto es, en la relación del “yo” con el Misterio de la divinidad.

En el cristianismo no se puede recoger la paz sin sembrarla (nadie da lo que no tiene) lo que supone un esfuerzo personal para alcanzar el don de la gracia divina. El Camino de la Paz Cristiana está construido con pruebas que nos prepararan en espera de la Gran Prueba que está por venir. La verdadera paz cristiana tan importante para una coexistencia se diferencia de la cultura de la idolatría al propio ego: ayudar y pacificar para ser alabados.

La paz verdadera cristiana viene de la Sabiduría y de una *recta razón*. La Sabiduría someterá a las persona elegida al flagelo de su disciplina probándola en sus pensamientos para poder fiarse de ella. Esta paz procede de una *conciencia recta* que dirige todas sus acciones.

En cualquier caso lo que suele entenderse como *la humanidad* del “ser humano” es algo de lo que la persona cristiana debe saber liberarse para poder transformarse en algo divinizado que implica un *cambio de actitudes* (de impaciente se hace paciente, de soberbia se hace humilde...). Paradójicamente el regreso al *anonadamiento* de la propia personalidad permite al *ser humano (viejo yo)* transformarse por el camino de la conversión en el *ser divino (nuevo yo)*. Cuanto más nos reducimos a la nada más somos llenados del Todo.

La paz es un estado cultural, social y personal ausente de conflictos porque el concepto de conflicto abarca tanto lo intergrupual como lo interpersonal. Intergrupual porque cualquier conflicto es una situación en la

que un grupo humano se encuentra en oposición consciente a otro u otros grupos humanos en razón de que persiguen objetivos e intereses incompatibles.

Todo conflicto supone una hostilidad latente, una tensión en la que la motivación principal viene a ser el cambio social. Se hace necesario regular el conflicto para que no degenera en algo destructivo o violento lo que se conseguirá con la *edificación del bien común* tutelando el derecho a la vida fundamento de todos los demás derechos inalienables del ser humano.

El respeto a la vida garantiza la democracia y la paz. Verdadera democracia es reconocer la dignidad de cada persona. Ser respetuoso con los demás da paz a sí mismo y paz a los otros.

Otro aspecto importante que genera la paz es *el orden* pues da el dominio a la criatura y la vuelve dominadora de sí misma y sobre todos. El verdadero orden lleva la unión, el acuerdo con todos.

Dado que la identidad personal (el bien personal) no se comprende sin una identidad social (bien común) es necesaria la responsabilidad y la participación en los intercambios sociales para conseguir una solidaridad lo que supone un esfuerzo en favor de un orden social más justo.

*1916 La participación de todos en la promoción del bien común implica, como todo deber ético, una conversión, renovada sin cesar, de los miembros de la sociedad. (...) (Cf. GS 30, 1).*

*-CATECISMO DE LA IGLESIA CATÓLICA- pág. 429.*

Puede decirse que el mal de la guerra proviene de la causa de falta de paz, pero no tiene causa propia ya que nadie en su sano juicio prefiere la

guerra. No puede haber paz si el acuerdo concordado con otros va en contra de las preferencias personales. La guerra es provocada por ese hecho discordante en las voluntades creyendo que se llegará a una paz más perfecta poniendo fin a una situación defectuosa e injusta. El resultado no puede derivar en acuerdos contradictorios sino en una situación que establezca el bien común, lo que supone esforzarse en trabajar por una ganancia mutua entre las partes en litigio.

La guerra es el desorden que ha roto la armonía entre la Voluntad Divina y la voluntad humana. Procede de la injusticia y la agresión que al rebelarse choca contra la Justicia Divina a la que es necesario satisfacer.

La guerra es un castigo divino porque la historia demuestra que el medio más potente para que los seres humanos entren en razón (y así puedan descubrir su auténtica identidad), es el verse deshechos ellos mismos como consecuencia de sus actos. El castigo más grande y terrible es el triunfo de los malvados que en su triunfo purifican purgando.

La Justicia de Dios es orden y si no castigase no estaría en orden con los demás atributos divinos. La Justicia, tachada de violenta por los humanos, es en realidad Amor purísimo hacia ellos. Por eso San Agustín dice que la bondad y la omnipotencia de Dios permite que del mal pueda sacar un bien. La esencia de Dios es la paz y debemos comprender que no es enojo divino cuando vemos los efectos de su Justicia.

En la Carta de San Pablo a los Romanos se expresa esta idea:

*“Sabemos que Dios dispone todas las cosas para el bien de quienes le aman, a los cuales él ha llamado de acuerdo con su propósito.”*

(Romanos 8, 28)

La paz exige primeramente un autodomínio de las pasiones siendo la obediencia a la voluntad divina lo que arranca desde la raíz tales pasiones humanas devolviendo al alma su estado primordial en el que se siente atraída por todo lo que es el bien y lo que tiende a la perfección. De ahí que el que tenga autoridad debe ordenar siempre lo que resulte el bien común evitando desigualdades escandalosas.

## SÍMBOLOS DE LA PAZ DEL ALMA

(Ideas tomadas de “*El libro de las Revelaciones Celestiales*” Santa Brígida de Suecia.)

Para hallar la paz el alma tiene que ser libre del cuerpo, de lo mundano, debe vaciarse de todo e incluso liberarse aún del deseo de autoconducirse, de creerse autosuficiente sin contar con la gracia divina. En este sentido el alma debe tener *alas* para poder elevarse de lo natural a lo sobrenatural.

También debe el alma ser limpia de todo pecado e intención mala: desapegarse de los pensamientos terrenales, de las preocupaciones lo que la empaña y le impide de unirse a Dios. En este sentido el alma debe ser como un *espejo* que refleja la luz divina.

Es preciso que el alma reconozca humildemente su nada. Es necesario que se humille reconociendo su miseria lo que le predispondrá al arrepentimiento y a pedir el perdón. En este sentido el alma debe ser como una mota de *polvo* que simboliza la humildad.

Y por último mencionar la pobreza del alma relacionado con el desapego de los bienes mundanos. Tener un espíritu libre renunciando a las cosas con las que nos imaginamos que no podríamos vivir. En este sentido el alma simboliza el *pan* con el que sabemos ser feliz.

## EL ALMA DE LA PERSONA SEGÚN EL PARADIGMA CRISTIANO

El alma según el paradigma cristiano es como un ente espiritual que tiene la capacidad de renacer por libre voluntad. El espíritu puede renacer por segunda vez (*no en la carne como sostiene la creencia de la reencarnación*) sino en el espíritu uniéndose a Cristo que al regenerarse se fusiona con el Espíritu de Dios.

La unión del cuerpo y el alma es tan profunda que su unión constituye una única naturaleza pudiendo decirse que además del cuerpo físico el alma es lo que somos: nuestra conciencia, las creencias, la razón y la voluntad.

El alma posee el espíritu de Dios que es el que lo infunde por medio de una continua generación espiritual, pero para poseer el Espíritu es necesaria la Gracia. La Gracia se merece por la sinceridad del arrepentimiento.

La gracia es poseer la semejanza intelectual con Dios, es el signo inconfundible de ser hijos de Dios. Sin la gracia el ser humano sería como los animales que si bien tienen una razón para guiarse en las contingencias de la vida terrena no sabría elevarse a la vida sobrenatural del espíritu. Perder la gracia quiere decir que el alma muere.

Como el alma ha nacido muerta por el pecado original hay que regenerarse, esto es, hay que hacerse un alma nueva renaciendo por libre voluntad.

Estrictamente desde el paradigma cristiano podemos señalar algunos presupuestos referentes al cuerpo y al espíritu:

La persona humana es un ser tanto corporal como espiritual.

“*Cuerpo*” es aquello que tiene una extensión limitada y que es perceptible por los sentidos. El cuerpo humano existe vivo precisamente porque está animado por el alma espiritual.

“*Espíritu*” se refiere al ser inmaterial y dotado de razón que comúnmente se denomina *alma racional*. El alma es espiritual.

El alma es una chispa vital que surge del vivo latido de Dios. Es el aliento de Dios que desciende a animar a una carne.<sup>(3)</sup>

En la creencia cristiana sólo el Bautismo disuelve aunque sin devolver la virginidad total, la alianza de origen entre el espíritu y la Culpa de la desobediencia a la voluntad de Dios de Adán y Eva. Queda la cicatriz del pecado original susceptible de convertirse siempre en una llaga.<sup>(4)</sup>

El alma está dotada de razón que es una de las cosas que más asemeja al ser humano a Dios.<sup>(5)</sup>

El espíritu del alma en el instante que es creada para ser unida a la carne ve el fulgor del Cielo de Dios y posteriormente recuerda este hecho ya que una de las semejanzas con la divinidad está en la posibilidad de recordar, ver y prever.<sup>(6)</sup>

No obstante toda cognición que no venga de alma en gracia (es decir de acuerdo a la Ley divina) difícilmente puede corresponder a la verdad.<sup>(7)</sup>

Como una semilla el cuerpo cae en la putrefacción cuando su tiempo ha terminado y el alma espiritual vuelve a su fuente para ser juzgada. No se reencarnará más en ningún cuerpo sino que resucitará para salvación o

condenación según como se haya vivido.

Mientras tanto la Iglesia ofrece al creyente para preparar ese encuentro final los sacramentos en las diversas etapas de la vida teniendo siempre presente la parábola evangélica de los dos caminos: el camino de la vida (Cristo) y el camino de la muerte. En el camino de la conversión por la gracia somos salvados y supone una dura lucha contra la propia voluntad.

Puede decirse que el objetivo para la consecución de un corazón pacífico es que la propia voluntad humana resucite en el Fiat divino para lo cual primero tiene que anonadarse. Una vez conseguido esto el ser humano no tiene ya más la voluntad humana lo que quiere decir que ya no existe peligro de que el humo de la propia estima entre en las propias obras reconociendo que es Dios el que obra en la propia nada. Dios es el portador de la nada y la nada es portadora de Dios.

Cualquier turbación debe desaparecer pues el alma vuelve a su estado pacífico siendo la paz la fuente de donde brotan las alegrías sin turbarse. Para que la voluntad divina se establezca en el alma ésta debe semejarse al Pacífico. No se trata de hacer la voluntad divina sino de vivir en la voluntad divina.

Este ideal de anonadamiento humano debe reflejar el de Jesús que vino a la Tierra no para hacer alarde de su Divinidad sino de su Amor. Esta humanidad divina de Jesús nos sirve de ayuda, de guía, y será la maestra para enseñarnos cómo se vive y cómo podemos romper el velo de su Humanidad para hacerla nuestra.<sup>(8)</sup>

Vamos descubriendo que todo las cosas creadas e incluso la misma criatura son velos que esconden la Divinidad de Jesús. Reconozcamos los

prodigios de Amor de Dios en el ser humano. El movimiento, la memoria, la inteligencia y la voluntad. Nuestra identidad nueva es un reconocer que no somos otra cosa que un velo que esconde a nuestro Creador.

## **CAMBIO DE ACTITUDES PARA LA CONSECUCCIÓN DE LA PAZ**

Si consideramos la conducta bélica como desahogo del interior humano, como expresión de la interiorización de un sistema de personalidad determinado claramente admitiremos la necesidad de cambiar de actitudes y valores.

El deseo de Paz está grabado en el corazón humano que de variadas formas en su historia ha expresado esa búsqueda de Paz. Pero este deseo con frecuencia es olvidado, desconocido e incluso rechazado según diversas razones como las rebeliones, la indiferencia y las corrientes de pensamiento hostiles a la Paz.

Todo esto nos lleva a considerar la Paz como una búsqueda que exige al ser humano todo el esfuerzo de su inteligencia y la rectitud de su voluntad poniendo en su lugar a las propias pasiones.<sup>(9)</sup>

El mismo ser humano al preguntarse en la voz de su conciencia personal sobre los posibles caminos de acceso a la Paz percibe signos de una “semilla de paz” que lleva en los más profundo de sí.

La humanidad vive actualmente como queriendo hacer por sí misma una unidad ideal de un orden a la vez cósmico, social y religioso de la pluralidad de las naciones creyéndose autosuficiente en esta pretensión.

La Paz es tanto una gracia como un acto humano. Como gracia es un don divino que mueve el corazón y como acto humano es libre. La



inteligencia y la voluntad humanas cooperan con la gracia divina. Obviamente la actitud pacífica es un acto libre porque nadie debe estar obligado contra su voluntad a vincularse a las exigencias de la Paz.

En un mundo visible todo existe según un orden y la interdependencia de las criaturas significa que ninguna criatura se basta a sí misma. La belleza del universo y su armonía va descubriendo leyes naturales con una jerarquía. Puede decirse que en la creación existe un fundamento y unas leyes que permanecen estables.

En el cristianismo el día de la Navidad se conmemora la fiesta de la divina maternidad de María, Reina de la Paz que nos dio a su hijo Jesús, Príncipe de la Paz.<sup>(10)</sup>

En este mundo pagano inmerso en el materialismo y en el hedonismo el Corazón Inmaculado de María nos indica el camino seguro que nos conduce al Dios de la salvación y de la paz. En una de sus apariciones en Fátima el trece de Mayo de 1917 nos indicó el camino que debemos recorrer para alcanzar la paz.<sup>(11)</sup> Es el camino de la conversión, el camino de nacer de nuevo en el espíritu tal y como lo señaló Jesús a Nicodemo.<sup>(12)</sup>

Podría indicarse sucintamente algunas etapas en el camino de la conversión para obtener la paz del corazón:

En un *primer estadio* el alma que potencialmente tiene la capacidad de renacer por libre voluntad acogiendo el don de la gracia es movida al arrepentimiento.

En un *segundo estadio* el alma es más consciente de hábitos y ataduras que le impiden progresar siendo cada instante de suma importancia para el progreso.

En el *tercer estadio* intenta pulir las virtudes en su corazón practicando

pues comprende que ninguna virtud se origina en el intelecto.

En el *cuarto estadio* intenta conformarse a la voluntad divina intentando hacer todo según la doctrina de Jesús. Todavía no vive en la voluntad divina.

En un *quinto estadio* el alma vive en la voluntad divina y aunque están unidas pueden distinguirse como entidades separadas.

En el *sexto estadio* la inmersión en la voluntad divina es total sin poder distinguirse una de la otra.<sup>(13)</sup>

## **INFLUENCIA DEL CAMBIO DE ACTITUDES EN EL SISTEMA SOCIAL**

Esta transformación personal de una actitud pacífica en el sistema de la personalidad tiene una implicación social. Siendo la sociedad un conjunto de personas hay una tendencia natural que hace a los hombres y mujeres asociarse con el fin de alcanzar objetivos.

Aunque esta tendencia a la socialización pueda presentar también peligros por una intervención demasiado fuerte del Estado que puede amenazar la libertad y la iniciativa de los actores sociales, hay que señalar la importancia en los procesos de socialización (familia, escuela, profesión...) del hecho de que hay una orientación colectiva hacia valores comunes compartidos.

El proceso de socialización consiste en adquirir la cultura adulta, formado por conocimientos, creencias y valores que conforman la cosmovisión del sistema cultural.

Los valores pacíficos de las creencias religiosas cristianas a los que nos hemos referido significa la incorporación de dichas pautas culturales en los

sistemas de acción de los individuos. Y esto porque los principios (dignidad humana, rectitud, integridad, honestidad...) no son todavía prácticas ni actividades que se efectuarán en la socialización.

En el sistema de creencias cristianas hay elementos sobrenaturales explícitos donde la pauta cognitiva esencial es la creencia en una misión divina del hombre, una vocación de la humanidad en manifestar la imagen de Dios y ser transformada a imagen del Príncipe de la Paz. Vocación personal pero concerniente también al conjunto de la comunidad humana.

El campo de acción no se encuentra orientado exclusivamente hacia “este mundo” al que se considera como un camino transitorio de peregrinación con referencia al Reino de Dios.

Para obtener cambios sociales que estén en concordancia con estos valores es preciso apelar a las capacidades de las personas para esa exigencia permanente de conversión y de aceptación de la gracia santificante en el camino de conversión continuo que es el proceso de la vida.

Es claro que una actitud altruista y pacífica fundamentada en este valor supremo de la gracia santificante permite a los grupos y a cada miembro conseguir una sociedad más perfecta ya que el bien común afecta a la vida de todos y tiene como objetivo supremo la verdadera paz.<sup>(14)</sup>

Este cambio de paradigma en la vida de la conversión se percibe como una excitante aventura y como una oportunidad para realizar aportaciones significativas en el ámbito social. Observando el todo de una manera equilibrada se distancia de situaciones considerando la mejor alternativa basando las decisiones en una conciencia moral educada en el principio de *la gracia santificante* como algo correcto sean cuales fueren las condiciones externas. No reacciona ante el mundo de una manera instintiva sino que

busca servir y ayudar a otros. Todas las experiencias de la vida no sólo se interpretan como oportunidades para aprender y aportar sino que trata de encontrar lo positivo en lo aparentemente negativo. El principio de la gracia santificante va desvelando que todo es para bien y que la carencia de tal don nos asemejaría a los animales.<sup>(15)</sup>

Según este principio la paz no es sólo algo que afecte al propio sistema de la personalidad sino que influye en el sistema social, en una socialización verdadera de la cual el mundo carece. Y como lo que no se tiene no se puede dar la paz verdadera por ahora es una aspiración, un ideal a conseguir.

Tener fe en este ideal es tener la plena seguridad de poder recibir la paz verdadera, es estar convencidos de que puede existir esta realidad aunque no la veamos. Es un hecho que las guerras vienen de los malos deseos que albergamos en el corazón por lo que debemos revestirnos de la nueva naturaleza, la del nuevo hombre que se va renovando a imagen de Dios, su Creador.

Para conseguir esta nueva naturaleza es claro que hay que renunciar a la acción violenta y recurrir a los derechos humanos que implican el respeto y el desarrollo de la vida humana como una exigencia para la paz.<sup>(16)</sup>

## **COSMOVISIÓN Y ESCATOLOGÍA CRISTIANA COMO IDEAL DE PAZ**

En el conjunto de creencias y doctrinas referentes a la vida de ultratumba el Apocalipsis de San Juan, según la escatología cristiana, hace referencia a un cierto caballo de color rojo que cuando el Cordero rompió el segundo sello recibió poder para quitar la paz del mundo y que los hombres se mataran entre sí.<sup>(17)</sup> Esta gran aflicción precede a la “multitud vestida de

blanco” que simbolizan a los que han lavado sus ropas y las han blanqueado purificándose.

Por ello la esperanza de una Ciudad Santa debe primero establecerse en los corazones y las almas en esta vida porque aquí vivimos purificándonos registrando en el libro de la vida nuestros hechos. Simbólicamente el Apocalipsis refiere la necesidad de “lavar las ropas” para tener derecho al árbol de la vida.<sup>(18)</sup>

La naturaleza en la que encontramos el mundo vegetal obedece a leyes climáticas y a las estaciones y podemos considerarlo un prodigio de progresión en la Creación. Este progreso aumenta en la vida animal, libre en sus movimientos e instintos que posee en su esqueleto las sustancias minerales de las que está compuesta la Tierra. En el reino animal están representados los reinos inferiores de los minerales y vegetales.

Toda esta evolución, que no autoevolución, culmina con la creación del hombre, criatura racional, dotada de palabra, de inteligencia y de razón. En el hombre se encuentra el reino mineral, vegetal, animal y como perfección el espiritual con el alma. Puede atribuirse a las criatura menores un cierto alma viviente diferente al alma como la posee el hombre.<sup>(19)</sup>

Todo este entramado ecológico natural así como la trama de la vida en lo que podríamos denominar la ecología humana tienen una interdependencia que no puede ignorarse pues de su equilibrio depende que sean beneficiosos para el ser humano. Nada hay inútil en la Creación hecha por Dios con un fin bueno por lo que el hombre debe corresponder a este amor usándolo con recto fin.

Entre estas maravillas de la Naturaleza encontramos la señal de la Paz: el Arco Iris como símbolo del puente entre el Cielo y la Tierra. Actualmente

en la escatología cristiana María es actualmente el puente de paz que une de nuevo el Cielo y la Tierra. María es una realidad viva. La diferencia es que el arca de Noé no salvó a todos los hombres sino únicamente a los que Dios encontró justos que son los que vieron el arco iris, en cambio actualmente María con sus diferentes apariciones puede ser vista por muchos que no son justos.<sup>(20)</sup>

## CONCLUSIÓN PROVISIONAL

Desde el paradigma cristiano sin el valor sociocultural de la *gracia santificante* no puede existir paz verdadera, a lo más podría hablarse de una paz humana imperfecta y transitoria, pero no perfecta y estable.

El principio de la gracia santificante resuelve el problema fundamental de la moralización del individuo por la sociedad internalizando valores en el sistema de la personalidad centrado en principios. Como resultado el individuo es libre respecto a las actitudes, conductas o acciones de los otros y su acción social sólo está limitada por su comprensión de las leyes naturales y los principios correctos.

La gracia santificante promueve además del respeto a las personas una conducta altruista como un conjunto de comportamientos que los seres humanos hacen voluntariamente en favor de otros con independencia de que pueda revertir algo en el propio beneficio personal. La motivación es incrementar el bienestar social de los demás como un elemento esencial del bien común. Las decisiones no obedecen a las limitaciones económicas o circunstanciales sino que se basan en el reconocimiento de una interdependencia en todas las situaciones procurando la mejor alternativa

basada en una conciencia moral educada por principios. Recogemos lo que sembramos.

Si bien el principio de la gracia santificante expresa la condición necesaria para una paz verdadera y se fundamenta en la primera de las tres virtudes teologales en la religión católica, como un asentimiento a la revelación de Dios, propuesta por la Iglesia, se reconoce una especie de camino común con las diversas creencias religiosas. La fe como conjunto de creencias puede reflejar según las diferentes religiones destellos de la Verdad que ilumina a todos los seres humanos, aunque sea de una manera imperfecta.

No obstante esto, se precisa discernir respetando tales diferencias. Actualmente la paz cristiana se encuentra inmersa en lo que podemos denominar el desafío de las “falsas espiritualidades”. En estas se enfatiza la voluntad (voluntarismo) y la inteligencia humana minusvalorando el valor de la gracia divina. En el mosaico de religiones existentes encontramos fes encerradas en el subjetivismo y como pretendiendo e intentando hacer un Dios a su medida. Se niega así el principio de la Revelación vaciándola de contenido y negando que Dios haya intervenido en la historia con un camino concreto que Jesucristo ha revelado.

Hay una actitud que intenta reformular la fe verdadera negando lo sobrenatural y considerando un pluralismo religioso donde si bien hay una cierta apertura a la transcendencia todo es susceptible de ser verdadero: todo lo natural es sobrenatural suele decirse en este tipo de planteamientos.

Las tendencias neopanteístas y neonaturalistas creen en una fuerza cósmica o energía que no les interpelará sobre su conducta moral pues la

divinidad es impersonal. No así en el cristianismo en el que la relación filial entre Dios y la persona (Dios personal) es de suma trascendencia. Se asume un juicio particular y otro final y una recompensa o castigo reconocido por la propia persona que a la luz de la divinidad se verá como en un espejo tal y cual es.

No debe buscar el hombre la paz en la tierra si primero no ha encontrado el camino del Cielo pues esa paz no es sólo Gracia, sino también conquista de cada día. Si obedeciésemos haciendo la voluntad divina y contradiciendo la propia sería la regla segura para perder las malas costumbres y alcanzar el objetivo de la verdadera paz.

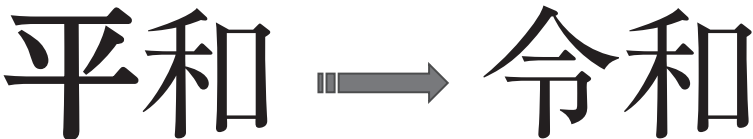
El lenguaje del Príncipe de la Paz ha cambiado todo el pasado, por lo tanto se trata de escuchar y comprender el nuevo mensaje viendo en lo viejo el germen de los nuevo. Hay que reconstruir y revisar los conocimientos de los actuales valores con humildad para encontrar el verdadero camino ya que la futura paz, la tranquilidad del hombre, no está en los valores actuales sino en los del mañana. Gran parte de la humanidad que se encuentra sin conversión ha crecido alimentada por el odio y educada en sistemas competitivos que parecen basados en el placer de aplastar y sojuzgar al resto.

Sin este reconocimiento del principio de la gracia santificante que implica el cumplimiento del principio de los Mandamientos no puede obtenerse la paz y felicidad. No pueden dar frutos de verdadera paz mientras los corazones de los que se reúnen para pactarla estén llenos de odio, maldad, apetencias de poder e intereses egoístas. No podemos comprometernos con valores contrarios a los principios del amor cristiano pues estaremos

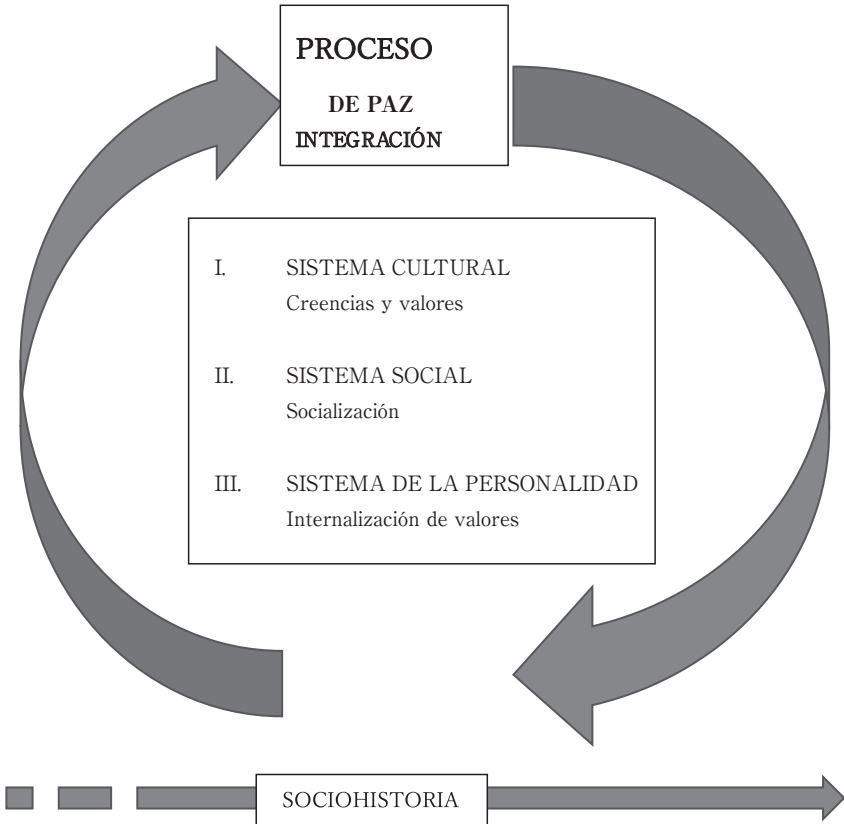


contribuyendo a la guerra del mundo.

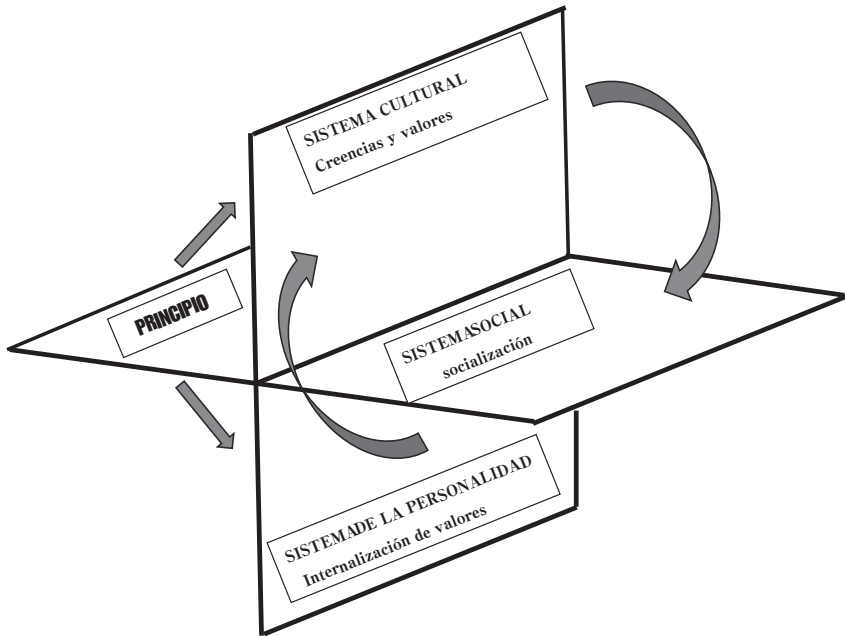
Existe una promesa del Príncipe de la Paz de una paz duradera restaurando la Iglesia reuniendo a los pacíficos hacia la Nueva Jerusalén. En la esperanza de un mundo nuevo renovado en el amor no desviemos ni un milímetro los pies del camino al corazón eucarístico de la paz. La paz del mundo depende de la santidad de las personas que aceptan e interiorizan el principio de la gracia santificante.


hei wa <span style="margin-left: 300px;">rei wa</span>
<b>Paz</b> <b>Bella Armonía</b>

## LA PAZ COMO VALOR



Valorar la PAZ es reconocerla, estimarla o apreciarla según el grado de su utilidad para satisfacer las necesidades o proporcionar el bien deseado según ciertos consensos establecidos en cada situación. Si nuestras decisiones residen en valores en los que no hemos meditado cuidadosamente, nuestras elecciones no dejarán de ser reactivas, influidas por el ambiente y el clima social. Tal actitud no tiene en cuenta la conciencia moral ni la voluntad independiente. Se aceptan ciertos valores en los que no se ha tenido ninguna involucración.

**LA PAZ COMO VALOR Y COMO PRINCIPIO**

Valorar la PAZ como principio quiere decir considerarla como una verdad profunda de aplicación universal. Cuando esta verdad se internaliza en el sistema de la personalidad como ACTO otorga el poder de crear variedad de prácticas para abordar y discernir diferentes situaciones. Si un sistema cultural de una sociedad adopta como pauta valorativa el principio correcto de *la gracia santificante* como algo que contribuye al bien común y la paz social, puede decirse que se guía por un principio correcto, tiene la verdad.

## REFERENCIAS BIBLIOGRÁFICAS

(1)

“Para ser amados hay que hacerse amar. Lo habéis olvidado muchas, demasiadas veces. Amad la paz. Es el signo de Cristo, que vuestros padres han matado atrayendo sobre vosotros la guerra que no tiene fin, y con pausas de tregua explota y resurge como una enfermedad insanable en el cuerpo de la Tierra y no os da seguridad y descanso. Ahora debéis aprender a amar esta paz para poder ser de Cristo y finalizar así el eterno éxodo de vuestra raza”. **Maria Valtorta. Los Cuadernos 1943, pág. 524.**

---

“Meditad. La guerra es odio y Dios no está donde hay odio. Para merecer a Dios es necesario estar sin odio. Hacia nadie. Es inútil cualquier medio si falta Dios. Y a Dios no lo podéis tener porque odiáis con una crueldad de fieras rabiosas por el hambre”. **Maria Valtorta. Op. cit. , pág. 573.**

---

“Y mientras que permanezcáis la generación perversa que sois, enemiga de Dios y del espíritu y amiga de la carne y de la sangre y del Incitador de la carne y de la sangre, no gozaréis de la paz verdadera. Verdadera: no ficticia como el estancarse de un mal crónico, que no es más que la secreta recogida de nuevas toxinas destinadas a desbordarse en la sangre para agravar cada vez más el mal que mata. Vuestras paces son iguales. No son más que recogida de fuerzas y de medios para guerras futuras más demoníacas. Os lo había dicho y hecho decir por mi santa Madre, por mis siervos a quienes les estaba desvelado el futuro. Pero vosotros negáis el milagro, vosotros negáis la revelación, vosotros negáis a Dios”. **Maria Valtorta. Op. cit., pág. 564.**

---

“Escucha hija mía, si el hombre con el castigo de la guerra se hubiera humillado y entrado en sí mismo, no serían necesarios otros castigos, pero el hombre se ha hecho más perverso, por lo que para hacerlo entrar en sí mismo son necesarios castigos más terribles que la guerra misma, y vendrán, por eso la Justicia va formando vacíos, y si supie-

ras qué vacío se va formando en mi Justicia con el no venir a ti, temblarías por ello, porque si Yo viniera a ti harías tuya mi Justicia, y tomando sobre ti las penas llenarías los vacíos que el hombre hace con el pecado, ¿no lo has hecho por tantos años? **Luisa Piccarreta. Volumen 12. Marzo 14, 1920.**

(2)

“La Paz fue prometida a los hombres de buena voluntad. Cristo ha venido para traer la Paz. Pero si echáis a Cristo y vuestra voluntad no es buena ¿cómo podéis tener la paz? Tenéis treguas. Pero éstas sólo serán pausas entre una y otra matanza, a fin de dar tiempo para que vuestros espíritus vencidos a Satanás aprendan de él nuevas doctrinas de muerte y nuevos instrumentos de destrucción” **Maria Valtorta. Los Cuadernos 1943, 9 de noviembre.**

(3)

Oh, el alma creada para ser alma de la Madre de Dios!... Cuando, de un más vivo latido del trino Amor, surgió esta chispa vital, se regocijaron los ángeles, pues luz más viva nunca había visto el Paraíso. Como pétalo de empírea rosa, pétalo inmaterial y preciado, gema y llama, aliento de Dios que descendía a animar a una carne de forma muy distinta que a las otras, con un fuego tan vivo que la Culpa no pudo contaminarla, traspasó los espacios y se cerró en un seno santo. **Maria Valtorta. El Evangelio como me ha sido revelado.** Tomo 1, pág. 15.

(4)

“Hasta en el más santo ha habido al menos un contubernio: el de origen, entre el espíritu y la Culpa, esa unión que sólo el Bautismo disuelve. La disuelve, sí, pero, como en el caso de una mujer separada de su marido por la muerte, no devuelve la virginidad total como era la de los Primeros antes del pecado. Una cicatriz queda, y duele, recordando así su presencia, cicatriz que puede siempre en cualquier momento traducirse de nuevo en una llaga, como ciertas enfermedades agudizadas periódicamente por sus virus.” **Maria Valtorta. El Evangelio como me ha sido revelado.** Tomo 1, pág. 29.

(5)

“¿Qué es la razón? Un don de Dios. Él, por tanto, puede darla con la medida que quiera, a quien quiera y cuando quiera. Es, además, una de las cosas que más os asemejan a Dios, Espíritu inteligente y que razona. La razón y la inteligencia fueron gracias otorgadas por Dios al Hombre en el Paraíso Terrenal. ¡Y qué vivas estaban cuando la Gracia moraba, aún intacta y operante, en el espíritu de los dos Primeros!” **Maria Valtorta. El Evangelio como me ha sido revelado.** Tomo 1, pág.39.

(6)

“El hombre ha sido creado a imagen y semejanza de Dios. Una de las semejanzas está en la posibilidad, para el espíritu, de recordar, ver y prever. Esto explica la facultad de leer el futuro, facultad que viene, muchas veces y directamente, por voluntad divina, otras por el recuerdo, que se alza, como Sol en una mañana, iluminando un cierto punto del horizonte de los siglos precedentemente visto desde el seno de Dios.” **Maria Valtorta. El Evangelio como me ha sido revelado.** Tomo 1, pág. 54.

(7)

“No hay otro modo; que lo tengan presente los que anhelan conocer secretos ultrahumanos. Toda cognición que no venga de alma en gracia — y no está en gracia aquel que se manifiesta contrario a la Ley divina, cuyos preceptos son muy claros — sólo puede venir de Satanás, y difícilmente corresponde a verdad por lo que se refiere a cuestiones humanas, y nunca responde a verdad por lo que respecta a lo sobrehumano, porque el Demonio es padre de la mentira y a quien arrastra consigo lo lleva por el sendero de la mentira. No existe ningún otro método para conocer la verdad, sino el que viene de Dios. **Maria Valtorta. El Evangelio como me ha sido revelado.** Tomo 1. Pág. 54-55

(8)

“Yo amaba a la criatura y no vine a la tierra para hacer alarde de mi Divinidad, sin de mi Amor, y por eso quise esconderme dentro del velo de mi Humanidad para herma-

narme con el hombre y hacer lo que hacía él, hasta hacerme dar penas inauditas y la misma muerte”. **Luisa Picarreta. Divina Voluntad. Diciembre 8, 1938.**

(9)

“La paz pone en su lugar a todas las pasiones, pero lo que triunfa sobre todo, que establece todo el bien en el alma y que todo santifica, es el hacer todo por Dios, es decir, obrar con recta intención de agradar sólo a Dios. El recto obrar es lo que dirige, lo que domina, que rectifica las mismas virtudes, hasta la misma obediencia; en suma es como un maestro que dirige la música espiritual del alma”. **Luisa Picarreta. Divina Voluntad. Mayo, 11, 1903.**

(10)

“Jesús os ha llevado a la paz con Dios, y así os ha abierto el camino de vuestra salvación y de la verdadera felicidad. Jesús os ha llevado a la paz con vosotros mismos, y así os ha abierto el camino de la paz del corazón. La misma sólo puede nacer de vivir en la gracia divina, que Él os ha merecido con su nacimiento entre vosotros, con su vida y con su cruenta inmolación sobre la Cruz”. **A los sacerdotes hijos predilectos de la Santísima Virgen.** 23 ed. Brasil, Ed. Loyola, 2011, pág. 604.

(11)

“Bajé del Cielo para indicaros el camino que debéis recorrer, en este siglo, para alcanzar la paz: El de la conversión y del retorno al Señor, con la oración y la penitencia. Bajé del Cielo para daros mi Corazón Inmaculado, como refugio donde resguardaros y el camino seguro que os conduce al Dios de la salvación y de la paz”. **A los sacerdotes hijos predilectos de la Santísima Virgen.** 23 ed. Brasil, Ed. Loyola, 2011, pág. 1181.

(12)

Jesús responde a Nicodemo el secreto de la seguridad de ver y comprender que el Mesías es Jesús el Nazareno en Juan y Simón:

“-Voy a manifestarte el verdadero secreto. Éstos han sabido nacer nuevamente, con

un espíritu nuevo, libre de cualesquiera cadenas, virgen de toda idea; por ello han comprendido a Dios. Si uno no nace de nuevo, no puede ver el Reino de Dios ni creer en su Rey”. **Maria Valtorta. El Evangelio como me ha sido revelado.** Tomo 2. Pág. 220.

“Yo lo he dicho que “es necesario renacer en el Espíritu para poder poseer la vida eterna”. El nacimiento de la carne de otra carne no os diferencia de los animales en otra cosa que en esto: que vosotros seréis juzgados por no haber querido renacer en el Espíritu. Los animales no son responsables de esto. Vosotros sí. Vosotros creyentes en mi Nombre, vosotros regenerados por el Bautismo, sí. ¿Por qué, entonces, no renacéis en el Espíritu? ¿Por qué matáis en vosotros el Amor?”

**Maria Valtorta. Los Cuadernos 1943. Centro Editorial Valtortiano, Italia, 1976, pág.57.**

---

Jesús después de la resurrección de Lázaro le pregunta sobre cómo será un alma purificada y éste contesta:

“-Pues... no sé... una perfección. Mejor... una nueva creación.

-Eso es. Has dicho la palabra precisa. El alma queda como recreada. El alma queda como la de un recién nacido. Es nueva. Desaparece todo el pasado, su pasado de hombre. Cuando desaparezca la culpa de origen, el alma, ya sin mancha ni sombra de manchas, será supercreada y será digna del Paraíso. Yo he hecho regresar tu alma, que ya se había recreado por la determinación al Bien, por la expiación del sufrimiento y de la muerte, y por tu perfecto arrepentimiento y amor alcanzados después de la muerte. Tienes, pues, un alma completamente inocente, cual la de un niño de unas horas. Y si eres un niño recién nacido, ¿por qué quieres vestir esta niñez espiritual con los molestos, pesados indumentos del hombre adulto? Los niños tienen alas y no cadenas para su espíritu alegre. Los niños me imitan con facilidad, porque no han adquirido todavía ninguna personalidad. Se hacen como Yo soy, porque en su alma exenta de improntas se puede imprimir, sin confusión de rasgos, mi figura y mi doctrina. En su alma no hay recuerdos humanos, ni resentimientos ni prejuicios. No hay nada, y puedo estar Yo ahí, perfecto, absoluto, como estoy en el Cielo. Tú, que te encuentras como renacido, uno



que ha nacido nuevamente, porque en tu vieja carne la capacidad motora es nueva, no tiene pasado, ni mancha, ni huellas de lo que fue; tú, que has regresado para servirme, sólo para esto, debes, más que todos, ser como Yo soy. Mírame. Mírame bien. Espéjate en mí, refléjame en ti: dos espejos que se miren para reflejar, el uno en el otro, la figura de lo que aman. Tú eres hombre y eres niño. Eres hombre por la edad, eres niño por la pureza de corazón. Tienes, respecto a los niños, la ventaja de conocer ya el Bien y el Mal, y de haber sabido ya elegir el Bien incluso antes del bautismo en las llamas del amor. Pues bien, Yo te digo a ti, hombre cuyo espíritu está limpio por la purificación vivida: “Sé perfecto como lo es el Padre nuestro de los Cielos y como Yo lo soy. Sé perfecto, o sea, semejante a mí, que te he amado tanto, que he ido contra todas las leyes de la vida y de la muerte, del Cielo y de la Tierra, para tener de nuevo en la Tierra a un siervo de Dios y a un verdadero amigo; y, en el Cielo, un bienaventurado, un gran bienaventurado”. Esto lo digo a todos: “Sed perfectos”. Y ellos, la mayoría, no tienen el corazón que tú tenías, digno del milagro, digno de ser tomado como instrumento para esta glorificación de Dios en su Hijo. Y ellos no tienen tu deuda de amor para con Dios... Puedo decírtelo, puedo exigírtelo a ti. Y en primer lugar lo exijo en una cosa: en no guardar rencor a quien te ha ofendido y me ofende. Perdona, perdona, Lázaro. Has sido sumergido en las llamas, en las llamas encendidas por el amor. Debes ser “amor”, para no conocer nunca otra cosa que no sea el abrazo de Dios”. **Maria Valtorta. El Evangelio como me ha sido revelado.** Tomo 8. Pág. 401.

## (13)

Ideas tomadas de “**La Revelación de Nuestros Corazones Unidos**”. Publicado por Archangel Gabriel Enterprise, Inc. Elyria.

## (14)

**1909** El bien común implica, finalmente, la paz, es decir, la estabilidad y la seguridad de un orden justo. Supone, por tanto, que la autoridad asegura, por medios honestos, la seguridad de la sociedad y la de sus miembros. El bien común fundamenta el derecho a la legítima defensa individual y colectiva.

**1910** Si toda comunidad humana posee un bien común que la configura en cuanto tal, la realización más completa de este bien común se verifica en la comunidad política. Corresponde al Estado defender y promover el bien común de la sociedad civil, de los ciudadanos y de las instituciones intermedias.

**1916** La participación de todos en la promoción del bien común implica, como todo deber ético, una conversión, renovada sin cesar, de los miembros de la sociedad. (...)

**Catecismo de la Iglesia Católica.** Madrid. Asociación de Editores, 1992.

(15)

“Sin la gracia seríais simplemente criaturas animales, llegadas a tal punto de evolución de estar proveídas de razón, con un alma, pero un alma a nivel de tierra, capaz de guiarse en las contingencias de la vida terrena pero incapaz de elevarse a las regiones en las que se vive la vida del espíritu; por ello poco más que las bestias que se regulan solamente por el instinto y, en verdad, a menudo os superan con su modo de comportarse.” **Maria Valtorta. Los Cuadernos 1943**, pág.50.

(16)

“La paz es dominio, no sólo de sí mismo, sino de los demás, así que delante a un alma pacífica quedan, o conquistados, o confundidos y humillados, por esto, o se hacen dominar haciéndose amigos, o se van confundidos no pudiendo sostener la dignidad, la imperturbabilidad, la dulzura de un alma que posee la paz; aun los más perversos sienten la potencia que esa alma contiene. Por eso me glorío tanto en hacerme llamar Dios de la paz, Príncipe de paz, y no hay paz sin Mí, sólo Yo la poseo y la doy a mis hijos como a hijos legítimos, los cuales quedan vinculados como herederos de todos mis bienes”. **Libro de Cielo. Luisa Piccarreta**, Volumen 01, pág. 983.

**2304** El respeto y el desarrollo de la vida humana exigen la paz. La paz no es sólo ausencia de guerra y no se limita a asegurar el equilibrio de fuerzas adversas. La paz no puede alcanzarse en la tierra, sin la salvaguardia de los bienes de las personas, la libre comunicación entre los seres humanos, el respeto de la dignidad de las personas y de

los pueblos, la práctica asidua de la fraternidad. Es la “tranquilidad del orden” (S. Agustín, civ. 19, 13). Es obra de la justicia (Cf. Is 32, 17) y efecto de la caridad (Cf. GS 78, 1-2). **Catecismo de la Iglesia Católica**. Madrid. Asociación de Editores, 1992, pág. 506.

(17)

“Entonces salió otro caballo, rojo; al que lo montaba se le concedió quitar de la tierra la paz para que se degollaran unos a otros; se le dio una espada grande”. **Apocalipsis 6,3. La Santa Biblia**.

(18)

“Uno de los Ancianos tomó la palabra y me dijo: «Esos que están vestidos con vestiduras blancas ¿quiénes son y de dónde han venido?» Yo le respondí: «Señor mío, tú lo sabrás.» Me respondió: «Esos son los que vienen de la gran tribulación; han lavado sus vestiduras y las han blanqueado con la sangre del Cordero”. **Apocalipsis 7,13. La Santa Biblia**.

---

“Y me dijo: «No selles las palabras proféticas de este libro, porque el Tiempo está cerca. Que el injusto siga cometiendo injusticias y el manchado siga manchándose; que el justo siga practicando la justicia y el santo siga santificándose. Mira, vengo pronto y traigo mi recompensa conmigo para pagar a cada uno según su trabajo. Yo soy el Alfa y la Omega, el Primero y el Ultimo, el Principio y el Fin”. **Apocalipsis 22,14 La Santa Biblia. (VERSIÓN BIBLIA DE JERUSALÉN, 1976)**

---

“La Ciudad Santa debe finalmente recoger la humanidad redimida y salvada, después de que por medio de la purificación de la gran atribulación y del terrible castigo, habrá sido completamente liberada de la esclavitud de Satanás, del pecado y del mal”. **A los sacerdotes hijos predilectos de la Santísima Virgen**. 23 ed. Brasil, Ed. Loyola, 2011, pág. 978.

(19)

“El alma viviente de las criaturas menores de que habla el Génesis no es el alma como la tiene el hombre. Es la vida, simplemente la vida, o sea, el ser sensible a las cosas actuales, tanto materiales como afectivas. Cuando un animal está muerto es insensible, porque con la muerte, para él, ha llegado el verdadero final. No hay futuro para él. Pero, mientras vive, sufre hambre, frío, cansancio; está sujeto a herirse y sufrir, a gozar, a amar, a odiar, a enfermarse y morir. Y el hombre, en recuerdo de Dios, que le ha dado ese medio para hacerle menos desahogado el exilio en la Tierra, debe ser humano para con sus siervos menores que son los animales. ¿En el Libro mosaico (Deuteronomio 22, 1-4.6-7) no está, acaso, prescrito tener sentimientos de humanidad también hacia los animales, sean aves o cuadrúpedos? **María Valtorta. El Evangelio como me ha sido revelado.** Tomo 8. Pág. 315.

(20)

“El arco iris, tras el diluvio, lo vieron únicamente los justos que quedaron sobre la Tierra. Mas, por el contrario, en la hora actual, María, el arco iris, la señal de la paz, en una sobreabundancia de misericordia, será vista por muchos que no son justos.” **Lecciones sobre la Epístola de San Pablo a los romanos. Arco Iris: señal de Paz.** (web)

*\*El autor desea expresar su adhesión a la doctrina del magisterio de la Iglesia Católica en cuanto a los posibles errores teológicos o dogmáticos.*